

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十二卷第八号
日本幼稚園協会

8

近藤充夫監修

一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動(全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 著

1、大型遊具を使って 2、小型遊具を使って 3、かけっこ・プール・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。保育を楽しくする画期的な全3巻です！

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にあるのが、本書の特徴です。

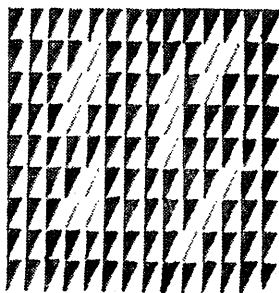
B5判・各200頁・定価各1,800円
セット定価5,400円

好評発売中

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



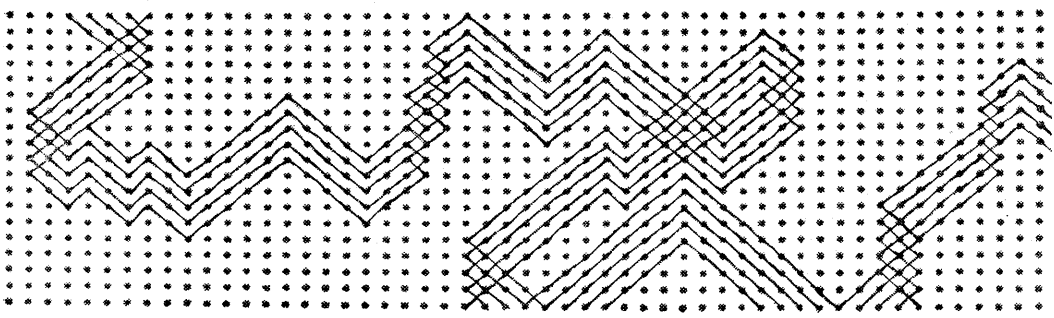
第八十二卷 第八号

幼児の教育 目次

— 第八十二卷 八月号 —

© 1983
日本幼稚園協会

「幼児の教育」編集三十年に思う……………	津守 真……………	(4)
引越しの弁……………	津守 真……………	(9)
ご挨拶……………	津守 真……………	(10)
子供の頃のこと……………	中村 為治……………	(11)
〈特集〉緑蔭図書紹介……………	川崎 千束……………	(18)
	藤本美穂子……………	(21)
	原口 庄輔……………	(25)
	菅原 啓州……………	(27)
	松田 徹……………	(31)
	中村 弓子……………	(35)



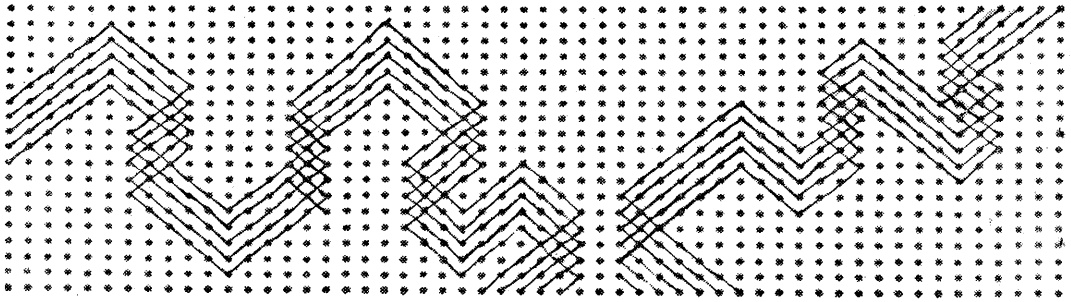
遠藤保子…(37)

幼少時の思い出あれこれ……………大槻虎男…(40)

公園にて……………田中三保子…(47)

ブリュッゲルの「子供の遊戯」12……………森洋子

表紙 紙 織茂 恭子
表紙題字 比田井和子
カット 福田 理恵



「幼児の教育」編集三十年に思う

津 守 真

「幼児の教育」誌の編集に、私がつきまわることになって、こととして丁度三十年になる。昭和二十八年十一月五日に、当時すでに健康がすぐれなかった倉橋惣三先生のお宅で、及川ふみ園長と私とが集まって編集会をしたのが、私の出席した最初の編集会である。

この雑誌は、もともと、東京女子高等師範学校附属幼稚園内フレイベル会から、明治三十四年に発行されたのが最初で、フレイベル会は後に日本幼稚園協会となったが、以来、東京女高師がお茶の水女子大学にかわって後も、一般の商業ベースの雑誌と違って、大学側で編集するという大方針はかわらずにつづけられてきた。それにしても、発行に伴う実務はフレイベル館が引き受けられ、編集の内容には一切関与しないという寛容さに支えられて、今日まで絶えずにつづけることができただのである。私の出席した最初の編集会で、まず話されたことは、この編集と発行に關することだったし、その後三十年間、この点について大きな変化なくつづいたことは、幸運なことであつた。

その最初の編集会で、私は何か話すように求められたとき、私はこの雑誌を売れるようにすることができるかどうか自信がないけれども、たとえ読む人が自分ひとりになっても、根本的なことを考えつづけるようにしたい、時の流行を追うことはしないつもりであるという趣旨のことを話した。いま思うと、全く大それた、自分勝手なことを言ったものであるが、そして、本当にそんな風になったら、保育雑誌として出版する価値はなくなってしまふのだが、倉橋先生は、そのことをたいへん気に入ってくださり、その意気ですよろしく頼むと言われた。それから長い間、私は折にふれてこのときのことを考える。幼児教育で根本的なことというのは、ただひとつの規準があるのではない。もしもそうだったら、毎日、毎年、違う内容の記事ができるはずはない。いろいろの人が、いろいろの角度から、子どものこと、保育のこと、自分自身のことなどを、根本にさかのぼって考えようとしており、そういう人たちは、書き手も読み手も毎年たえることなく、たくさんある。この雑誌は、こういう方々に支えられて現在に至っている。根本的なことは、具体的なことをはなれであるのではないから、雑誌の記事は常に多様で、新しくなっていく。

最初の編集会のときに、この雑誌の編集方針について話されたことのメモが私の手もとに残っている。十項目にまとめて記してあるので、この機会に紹介したい。次に掲げるのは、そのときのメモの順序のままの、十項目の要約である。

- 1、保育の根本を理解させ、保育の精神を伝えることを従来からの方針としてしていること
- 2、幼稚園史の資料となるような、各地方の幼稚園の今昔をとり上げること
- 3、幼児保育者としての根本問題で、保育に直接関係のないような分野の人たちによる記事、保育者にふわりとした感じを与える記事をいれること
- 4、文学的読みものをいれること

5、母親が理解できる程度の講座をいれること

6、協力委員が交替に執筆すること（当時、協力委員が六名きまっていた）

7、倉橋先生の保育考をできるだけ多くとりいれること

8、保育研究の前進のため、専門学者の協力のもとに、保育界の問題および保育理論の研究の項目をいれること。保育に関する研究の発表機関になるように

9、投稿は検討の上、できるだけとり上げること

10、海外の幼児教育事情をとり上げること。外国人の執筆があるとよい

倉橋惣三先生は、このときから一年半後に亡くなった。協力委員は、牛島義友、及川ふみ、斉藤文雄、多田鉄雄、波多野完治、山下俊郎の六名の方々だったが、牛島、波多野両先生以外は、皆、亡くなった。

こうして各項目を見てみると、三十年の間に時代が変わったことを感じるし、それぞれの項目について、幾多の変遷があったことを思う。また、いずれも、十分に果せなかったことに気付くけれども、しかし、大ざっぱに言えば、ここに掲げられたことは、現在の編集方針と大差はないことを確認できる。

いま、この三十年間を顧みて、私は直ちに二つのことが頭に浮ぶ。第一は、幼稚園の普及に伴うこと、第二は、知的早教育の風潮に伴うことである。

幼稚園の増加、就園児数の増加が、この三十年間ほど著しかった時代は他にはなかった。このことは、現代において避けられなかったことであるにせよ、いくつもの問題を生んだ。私が観察する

ところでは、幼稚園が急増したとき、そのときの社会的要請が優先し、幼児教育についての先輩たちの思考や実践の積み重ねは、ほとんど顧みられなかった。昭和初頭には相当の水準にまで高められていた日本の幼児保育の上に、新たな時代の要請を加えてゆくのでなく、先人の努力の歴史から切断されて、幼稚園が普及した。そこでは、幼稚園には子どもの生活を第一に考える場所ではなくなり、最新の学問の応用と称する人為的な訓練や、経営者の恣意が優先し、あるいは、行政上の規準が、必要以上に、保育の内容まで束縛する傾向を生んだ。

上掲の2の項目で各地方の保育史が挙げられているのは、柔い性情の幼児にふさわしい保育の場をつくることを何よりもたいせつと考えて出発した幼児教育の先覚者のスピリットにたえず新たにふれるという意図があったと思う。現代の社会には、過去のいかなる時代にもなかったような新たな問題があり、その中で、物的にも、精神的にも、幼児の生活を確保することには新たな困難がある。私共は、実際に、そのただ中にあるので、子どもと共に生活をつくることを第一に考える原点へと、たえず立ちもどる必要があるのだと思う。

幼稚園がこのように普及し、制度化された現在、教師の身分が安定する反面、職務内容が固定化して、子どもと共に生活をつくり上げるよりも、きまった枠の中に子どもをいれることをもって教師の仕事と考える気風を生んでいる。しかし、子どもを育てる仕事は、子どももおとなも、冒険心をもって未知の可能性に挑戦する勇気を失ったときに、人間の最も大切な部分を失うのではないか。

知的早教育の風潮は、一九六〇年代に最高潮で、現在は子どもを多面的に見る傾向が強まっているとはいえ、現代の学問として、幼児の発達や教育をどう考えるかという根本課題は未解決であり、不安定である。前掲の8の項目に伴う問題である。一方に、眼前の現象に左右されることなく、そ

れらを通き支配する原理と法則を求める科学的学問であり、人間や教育もその学問の対象とすることは可能であり、その観点からは価値もある。しかしまた、他方、子どもという未知な可能性もった他と交わることを中心課題とする保育の領域においては、眼前の現象のすべてに着目し、そこでとらえられたことを全体と根源に結合する思考法を必要とする。幼児の保育は、この後者の学問によって支えられると私は考えるが、その内容は、この分野で未だ十分に展開されていない。今後の保育学の課題である。

三十年前の最初の編集会のときに、倉橋先生から云われたことがもうひとつあった。それは、この雑誌では、執筆者に肩書きをつけないことを習慣としてきたということである。その人に書いて頂くという趣旨である。

子どもが遊ぶことのできる幼稚園をとすることは、この雑誌の創刊以来の主張であった。そして、幼児の生活のあるがままの全体に心を配る保育は、本誌でくり返しとり扱われたテーマであった。生活を共にして幼児を育てる保育者の中には、このことのたいせつさを体感で感知している人はたえずいる。声を大きくして主張することによって教えられるのではない。いつの時代にも、どこにも、自ら獲得することのできる人間の事実である。それだけに、そのことの価値を明らかにし、認識することはたいせつである。本誌の重要な機能のひとつは、そのことにあるようだ。

なおこの間、編集の実務については、池戸允子、木原溥子、寺井直子、赤間峰子、水田順子、皆川美恵子の六名の方々にお世話になった。いずれもお茶の水女子大学の関係者である。ここに記して厚く感謝したい。

引越しの弁

津守 真

本年の三月末で、私はお茶の水女子大学教授を辞めることになった。人が職をかわるのは、普通にあることで、別段とりたてて変わったことでもないはずだが、理由に興味をもたれる方が多いので、一言、記させて頂きたいと思う。公的な性格の雑誌に、個人的なことを記すことにためらいもあるが、なかく編集主任をしていたので、進退の理由を明らかにするつとめもあると思ひ、敢て記す次第である。

私は、大学を卒業して間もないころ、恩賜財団母子愛育会愛育研究所で、研究員をしていたが、教育相談で知恵おくれの幼児の相談にあずかったのがきっかけで、当時、知恵おくれの幼児のための幼稚園は皆無だったので、研究部長であった牛島義友先生の研究室を開放して頂いてこの子どもたちの保育を担当することになった。私が倉橋惣三先生と知り合うようになったのも、この仕事を契機としており、私がこの雑誌にはじめて文章を書かせて頂いたのは、昭和二十五年六月号で、「幼児教育と特殊教育」と題して、この仕事のことを書いたものである。

その後、私はお茶の水女子大学に奉職することになったが、ひきつづき、愛育研究所の非常勤研究員として、知恵おくれの幼児の保育室の実際と研究に参与してきた。この保育室は、後に養護学校に発展したのであるが、最近、養護学校が義務化され、種々の外的事情も加わって、長くこの仕事に参与してきた私が校長をひき受ける特別の必要を生じた。私は大学でも保育学を担当する者であり、教授と兼任できると思っていたが、文部省の方針では、国立大学教授は、校長や病院長、博物館長などの職との兼任を承認しないということであり、私はいずれかを選ばねばならなくなった。いろいろと迷ったが、私は、保育の現場の実践と表裏をなす研究を志す者であり、愛育養護学校長に就任することにした。大学の同僚、後輩、学生への迷惑を考えると、何と云ってよいかわからないが、これは善悪、是非をこえた運命のようなものだと思う。

障害をもった子どもの保育というと、普通の保育と違うと思われることがある。具体的には違うこともあるけれども、子どもの見方や保育の根本は共通である。むしろ私は、これは保育の原点にある仕事だと思っている。引越しをしても、私は従来にひきつづいて、一層広い視野に立って、保育学の学徒として歩みたいと思っている。

二 挨拶

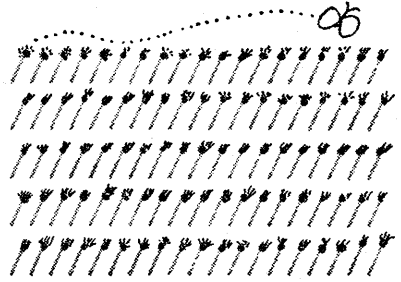
このたび、私は、愛育養護学校長に就任するために、お茶の水女子大学教授を辞することになりました。「幼児の教育」誌には、微力ながら、ほぼ三十年間にわたって、編集主任として参与させて頂きましたことは、大きなよろこびでありました。

今後は、本誌と長年縁が深い、また最近十数年は編集委員として活躍してこられました本田和子氏が、編集主任の責を引き受けられますことを、ここにご挨拶させて頂きます。

なお、私は、今後もできるかぎり、本誌の発展に協力させて頂きます。従前とかわらず、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

昭和五十八年四月

津守 真



子供の頃のこと

中村 為治

父はほんとうにいい父でした。

母はほんとうにいい母でした。

今もいつも父と母のことを思い出します。父と母のことを思い出すと、いつもうれしくなります。裕福な暮らしでした。父母に可愛がられて育ちました。私の三、四歳の頃は「為治生立日記」というのを書いて残してくれました。私はこれを宝物として大事に持っています。

幼稚園は芝公園の中にあつた「芝麻布共立幼稚園」に通いました。田中先生という堂々とした女の先生が園長先生でした。姉もここに通っていましたが、後お茶の水の幼稚園に行くようになりました。幼稚園には大きな桜の木があつて美しく花を咲かせ、花びらがひらひらと散りました。門の前の幅一間ほどの溝には、こうほねの黄色い花が咲きました。垣根はからたちの垣根でした。

遊戯室には大きなガラス戸のはまった戸棚があつて、中にはいろいろな鳥や獣の剝製がはいつていました。白さぎや鷹や鷲がいました。リスやいたちもいました。大きな高脚蟹やたいまいも壁にかかっています。私はこれを見るのが好きでした。

教室では腰かけのついた小さな机に腰かけて、折紙をしたり、細く切った折紙をもう一つの条を切った折紙に挿して模様を作ったり、絵をかいたり、粘土細工をしたりしました。その頃伊達さまのおひいさまというのが姉の組にいました。姉は「伊達さまはちりめんのお枕でーえおふとんも」という歌をつくり、自分で節をつけて歌っていました。私も今でもその歌を歌うことができます。

幼稚園からは大門まで歩き、大門からは鉄道馬車に乗って銀座まで来、銀座からは歩いて明石町の家に帰りました。馬がきれいな馬だとうれしく、きたない馬だといやでした。新橋の角には博品館という勸工場があつて、そこではゼンマイ仕掛けの汽車がトンネルを出たりはい

ったりするおもちゃや、水鉄砲や紙風船や南京玉を買ってもらいました。コルクの栓をつめて引金を引くと、ポンと大きな音のする鉄砲も買ってもらいました。

明石町の家の庭には大きな石がいくつもあつて、そこにはよくとかげが出て来て日向ぼっこをしていました。またさざんかの木があつて、冬に美しい花を咲かせました。私はさざんかの花が好きでした。今も好きです。

長徳というまだ子供の書生がいて、二人でよく遊びました。長徳は絵が上手だったので、一緒に絵をかき、クリムソンレーキ、ガンボージー、サップグリーン、コバルト、プロシャンブルー、セピヤというような色の名前を憶えました。

ミセス ハンブレンの日曜学校では *O How do you do, and how do you do, and how do you do, to-day. Lips say good morning, eyes say good morning, ears say good morning, to you, and you.* という歌を習い、それに節をつけて今も歌うことができます。ミセス ハンブレンの家にはいると、いつも天火やバタのにおいの

ようなにおいがしていました。居間の大きな石油ランプにかかっていた薄紫のランプシェイドはほんとうにきれいでした。母はここで白ソースの作り方をおそわり、牛肉のシューシューに白ソースをかけて食べるのは私の大好物でした。

お正月の来るのは何よりもうれしいものでした。「もういくつねるとお正月、お正月にはたこ上げて、こまをまわして遊びましょ、はやくこいこいお正月」という歌の通りでした。鴨雑煮はおいしいものでした。二色玉子ときんとんはうれしいものでした。いろはがるたをしたり、すごろくをしたりしました。そして私はたこ上げに夢中になってしまいました。

三月三日は雛祭り、姉や妹のたくさんのお雛様が並べられ、ぼんぼりに灯が入れられ、桃の花が飾られ、白酒や菱もちや桜もちや飴細工のきれいな飴や雛あられが供えられました。

五月五日は男の節句、鎧かぶとや武者人形が並べら

れ、旗さしものが飾られ、糸を引くと上ったり下ったりする鯉に抱きついた金太郎もありました。そして庭には鯉のぼりが上げられました。始めは黒と赤の二匹でしたが、そのうちに小さな鯉もいくつかつけて、子供の鯉だと言ってよろこびました。

よく上野の動物園に行きました。せいやといういい女中に連れられて行きました。銀座の木村屋であんパンやじゃみパンを買い、それから電車で上野に行き、動物園に行きました。昔の動物園はいい動物園でした。土があって、木が繁っていて、ほんとうに静かでないところでした。今も昔と全く変わらないのは、はいつて直ぐの谷底にある丹頂鶴のいるところだけです。先日行きました時にも、やはり二羽の大きな丹頂鶴がここにいました。大きな丹頂鶴はほんとうに美しい立派な鳥だと思いました。象は昔後脚の一つを鎖でつながれて、大きな木造の小屋の中にいました。前にはお煎餅をやることができましたが、今ではもう何もやることができせん。ライオンや虎や豹は木造の建物の檻の中にいました。虎が肉の

塊りを食べるのを見ました。北極熊は今も昔と変わらず、狐や狸はひどく臭く、らくだは口からあぶくを出しているので、きたないと思いました。動物園の帰りには池の端のお汁粉屋でお汁粉をたべ、山下でゴム風船や、吹くとピーッといつて長く伸び、またくるくると巻かれるおもちゃなどを買って帰りました。

浅草の花屋敷にも行きました。花屋敷では「鍋島の猫騒動」というあやつり人形を見ました。目が皿のようでも口が耳まで裂けている大きな猫があんどの油を舐めていました。あしかが水槽の中ではちゃんばちゃんと泳いでいるのも見ました。大きな鯛やすずきが泳いでいるのも見ました。また赤い卵をおなかにつけた可愛い鮭の子がいっぱい泳いでいるのも見ました。

明石町の家の前には両岸が石垣になっている川がありました。その石垣からは引き潮になると蟹がはい出してきました。その蟹をしゅろの輪をつけた竹竿で釣り上げました。もくぞうやみずがには釣れましたが、べんけい

は素早く隠れてしまおうのでなかなか釣れませんでした。また上げ潮になると目高が目高の学校のように泳いで来ました。それをかやで作った網ですくい上げました。そのすくい上げた中には小さな透き通った小えびもまざっていました。また家の前の空地の草むらではとうすみとんぼやおうとを取りました。ぱったはおながぐにやぐにやしていて、口から黒い汁を出すので取りませんでした。

春には月島に渡って、もち草を取ったり、しじみを取ったりしました。始めは佃島の渡しだけで、ろをこいで渡しましたが、後にはかちどきの渡しができ、蒸気に引かれて渡りました。向う岸に近づくと蒸気はチーンと鐘を鳴らして渡し舟をはなし、渡し舟はそのまま進んでドンと岸につきました。月島は広い野原でした。たんぼぼが咲いていて、蝶々が飛んでいて、空では雲雀が鳴いていました。もち草もたくさん取れました。しじみもたくさん取れました。私はしじみのみそ汁が大好きでした。そのしじみは夕方になると小さな男の子が「しじみ、し

じみ」といって売りに来ました。もっと大きな男の子は「いわしこ、いわしこ」といって鯛を売りに来ました。

夏には年寄りの朝顔屋さんが「朝顔や、朝顔」といって売りに来ました。「あっ朝顔屋さんだ」と言って、皆で飛び出して行って朝顔を買いました。紅いの、白いの、青いの、紫の、茶色のと、いろいろありました。この朝顔屋さんは年寄りで、しわだらけで、まっ黒に日焼けしていて、流れる汗を手拭いでふいていました。ほんとうにいい朝顔屋さんでした。

その頃は三輪車に乗って明石町の居留地の中を走り廻りました。異人さんのお母さんが小さな子供を乳母車に乗せて散歩していました。私は妹や弟を三輪車の後ろに乗せて、橋のたもとの急な坂道を一気に走り下りました。妹や弟はこわがって、私にしがみついて、キャーキャーいきました。

七ツで高師の附属小学校にはいりました。学校は道路を隔てて高等商業の隣りにありました。明石町から日比

谷まで歩き、電車に乗って錦町三丁目まで行き、そこから歩いて学校まで行きました。そのうちに外壕線ができたので、明石町から鍛冶橋まで歩き、外壕線に乗って錦町一丁目まで行き、そこから歩いて学校まで行きました。学校の運動場には大きな柳の木がありました。一、二年は赤房、三年から上は白房でした。帰りにはよく友達と一緒に歩いて、一ツ橋を渡り、お壕端を通り、三菱ヶ原を抜け、鍛冶橋、京橋を渡って明石町の家に戻りました。お壕端の柳の新芽はきれいでした。ある日のこと学校からの帰りに錦町の手前の洋服屋の犬が寝ていたので、頭をさすってやったら、ワンといて左手の手のひらを咬まれました。ハンケチで押えて、家に帰って、ころんで釘をさしたと嘘を言いました。すぐに林病院に行って手当てをしてもらいました。

学校で好きだったのは手工の時間でした。一所懸命に鉋をといで板をけずりました。六年の終りには小形の茶だんすを上手に作りました。また乾電池と電磁石と三輪車のベルを使って呼び鈴を作ったり、太い竹の筒で吸上

げポンプを作ったり、試験管に石炭の粉を入れてアルコールランプで熱してガスを出させ、それを細くしたガラス管の先から吹き出さして火をつけたりしました。しいことは何でもすることができました。ほんとうに楽しい子供の時代でした。

夏休みには毎年越後の鯨波に行きました。楽しい楽しい夏休みでした。朝の散歩では、海岸の波打ちぎわを歩いて貝を拾ったり、山に行つて山百合やおみなえしやなでしこを取ったりしました。八時から十時までは勉強の時間で、十時と三時に海にはいりました。昼には魚を取りに行つたり、投網を打ちに行つたりしました。また山の草原にぎりぎりすや蝶を取りに行きました。夕食後には家のすぐ下の砂浜で、鬼ごっこをしたり、かけっこをしたり、後ろの正面だーれをしたりして遊びました。またよく絵をかきました。真正面の佐渡ヶ島をかいたり、鬼穴のある岬をかいたりしました。また母がお産やなどで来られない時には、よく母に手紙を書き、絵や習字を送りました。鯨波の朝日は山の後ろから出るのでよく分

りませんが、夕日は日本海に沈むので、それはそれはきれいでした。

鯨波では朝漁師のおかみさんが取れたての小鯛を箆にのせて売りに来ました。大きなすずぎが取れた時には漁師が自分で売りに来ました。小鯛の塩焼きや煮つけもおいしかったが、大きなすずぎの刺身とあらの煮つけはとてもおいしいものでした。そのおいしさは今も忘れられません。

小学六年になった時、小学校は一ツ橋から大塚の高師の裏の崖下に移りました。築地一丁目から電車に乗り、日比谷で乗りかえ、春日町で乗りかえ、伝通院前で下りて、学校まで歩きました。新しい校舎では毎日雑巾がけをしました。そこには池があり、木が繁っていて、静かないい所でした。学校の帰りにはよく友達と一緒に小日向台町に出、久世山の険しい高い崖を一気に滑り下りて江戸川橋に出、そこから電車で伝通院を廻って家に帰りました。

その頃アメリカン・スクールは明石町の居留地にあり
ました。小学五年の頃からそのミス タッカーに英語
を教わりました。虹は「売れん棒」と憶えました。ある
日ミス タッカーは新調の美しい薄紫のワンピースを着
ていました。Your dress is very beautiful と言ったら、
ミス タッカーは大そうよろこびました。またミス タ
ッカーは Fugetsudo's ice cream very nice と言ってお
いしそりに食べる真似をしました。また No thank you
という言葉を習ったあとで紅茶を出されました。砂糖を
入れますかと言われた時、姉は習いたての No thank
you を言っていました。ミス タッカーは目を丸く
しました。私は Thank you と言って砂糖を入れてもら
いました。

そして附属小学を卒業して附属中学にはいりました。
その時附属中学はお茶ノ水の煉瓦造りの立派な校舎でし
た。西隣りには女高師があり、東隣りには聖堂がありま
した。

「春湯陵の花のかげ、秋茗溪の月のもと、飛び交う胡蝶

は風に舞い、下行く水は楽奏ず、慈愛平和にみち満て
る、自然の寵児我なるぞ。」と校歌に歌われている私は私
自身のことと思われました。

だが校舎はその年の秋にお茶の水から大塚の本校のわ
きに建てられた、明るい、薄緑色の新しい校舎に移りま
した。そして私も子供の時代から中学生の時代に移りま
した。けれどもいつも

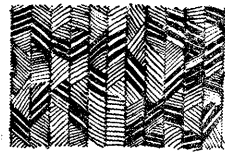
父はほんとうにいい父でした。

母はほんとうにいい母でした。

〔著者紹介〕 明治三十一年一月十七日生れ。昭和十六年
まで東京高等商業学校(現一ツ橋大学)の英文学の教授。
その後、長野県安曇村で農夫として生活。著書に、ロバ
ート・バーンズの研究、『エチカ』の翻訳(山本書店刊)
等があります。お母さまは、女子師範の附属幼稚園を卒
園されたとのことです。

私の行脚的読書から

川崎千束



当時の三重県立津高等女学校は三重県下の才媛の集りとなっていたが、あくせくと勉強しなくてもよき時代であり、私の得意の学科は数学で授業の時だけ教科書を開いて事足りたので、あり余る余暇を利用して して漱石の坊ちゃんに始まり手当り次第に濫読した。漱石・鷗外・橋牛・蘆花・藤村・子規・一葉・有島武郎の諸作品、カール・ブッセの詩もある上田敏の海潮音・二葉亭四迷の浮雲・荷風のすみだ川・倉田百三の出家とその弟子・田山

達間を廻っていた筈が私の手元には戻らなかった。因に当時は一日が六校時で、水泳・テニス・弓術・自彊術・月次遠足・小笠流・千家の裏流・未生古流と、テニスを除く他は皆正課で誠に質実剛健の校風であった。しかし余暇利用者は他にも何人かあり、前記の諸作を全部手持の本で読んだのではなく貸し借り回覧であったが、表面は慎ましい良妻賢母の卵たちであった。親友の父上が歩兵第五一聯隊長で、その書架のお陰を大きく蒙り幸せて

花袋の田舎教師・茂吉の赤光・晶子のみだれ髪・吉屋信子の花物語・長塚節の土など。姉夫婦が親戚の澤瀉久孝先生に師事していたのでその余波をうけ、判っても判らなくても万葉集・源氏物語を読んだ。万葉の歌のしらべの大らかさ、源氏の流麗な文体に魅せられた。花物語を寄宿生に貸したのが見つかり職員室に呼び出され「こんな軟弱なもの」と叱責された上三冊の物語集は取上げられてしまった。同じ頃夢二の春夏秋冬の四冊の画集も友

あった。その時代の聯隊長殿の書架には翻訳書は少なかったようで、レ・ミゼラブル・モンテクリスト・クォヴァディスなどを噫無情・巖窟王・主よ何処へという題名で読んだ。サイラスマーナー、イノックアーデンは兄からリーダーを訳してもらって識り、ハイジ・アンクルトムスケビン、復活などの数冊が外国文学に接する契機となった。

保育科在学中、倉橋先生の幼稚園雑草は私の保育への進路を確かなものにした。先生は講義中蕪村の句を引用されたので、その句集や、ギリシャ神話・グリム・アンデルセン・アラビアンナイト・小川未明の童話集などを手にとった。

卒業直後の任地盛岡での二年間は、土地柄、啄木、宮澤賢治・柳田国男・坪田譲治のもの。青い鳥・ホメーロスのイリーアス物語。県別郷土玩具二巻武井武雄などが記憶にある。

家庭生活の廿年間は育児に忙しく、その上嫁の座にあり、義兄や夫のエコノの書籍は私には縁遠く、縫物をひ

らげた下に本を置くという読書であったが、海綿が水を吸い込むように頭に沁み入った。それというのも左の数冊は弟の形見の本だから弟を偲ぶよすがに繰返し繙いた。弟は学校を出て幾許もなく御用船の機関長として出征する際、地方に嫁していた私にこれらの本を托して征ったが遂に還らぬ人となってしまった。

その書名を挙げると、寺田寅彦全集十二巻岩波の初版本・別冊の触媒・中谷宇吉郎の雪・内田百閒の百鬼園隨筆 大宴会（装幀題畫津田青楓）出征する身がこの書中の旅順入城式をどんな想で読んだらうか。和辻哲郎の古寺巡礼・風土、楨有恒の山行、ルイス・トレンカの雪山の生活者。小泉八雲全集の第二巻、萩原井泉水の京洛小品、藤村の夜明け前、藤村成吉の渡辺崋山、薄田泣菫の猫の微笑、横光利一の機械、谷崎の春琴抄・盲目物語・吉野葛・蘆刈り、戦争と平和・アンナカレーニナ（トルストイ）ドストエーフスキー・罪と罰、ツルゲーネフ・猟人日記、ゴリキー・どん底、プーシキン・大尉の娘、ショーロホフ・静かなドン、ミルトンの失樂園、島木健

作の獄。

これらの本に刺激されて、若い時からの願望であった外国文学を熱読したが、地方で容易に入手できるのは代表的名作が多いので書名を割愛する。芭蕉七部集、謡曲本を読んだのもこの時代である。

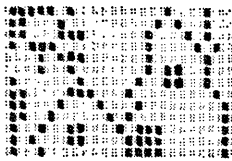
復職してからの廿余年は文学書には目を瞑り、まずルソーを、パスカルを読んで幼いひとたちの中に埋没した。必要にせまられて読んだ心理学書や保育関係の書は省略し、夏休みや折にふれ読んで心に残ったものを書名だけ列記すれば、

迷路・海神丸・秀吉と利休。天平の薨・遺跡の旅
シルクロード、風立ちぬ・大和路信濃路、城の崎にて・暗夜行路、路傍の石、羅生門、放浪記、蟹工船、野菊の墓、斜陽

三好達治・木下左太郎・八木重吉の詩集

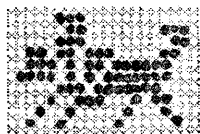
柳田国男、会津八一全集中の数冊、天声人語・雪椿二卷、我が遍歴の山河、風景との対話、甘えの構造二卷。人間讃歌（古在由重）、羊のうた、涙をたらした神。論

語。廿日鼠と人間、シャロックホームズの回想と緑蔭号のもので、失敗と思われるのは、孫の為に岩波少年少女文学全三十巻、ドリトルもの十二巻、アーサーランサム全集を取揃えてやったが、既に高校生になった彼がこのうちの幾冊を読んだであろうか。私のように飢えの状態で手に入れて読む喜びが読書の本筋なのである。然し、大人になってからまたこの少年文学を読むであろう日も心のどこかで信じている。



『ゴッホ』 小川国夫 著

平凡社



藤本 美穂子

「彼はたしかに幼い頃から絵を描くのが好きだった。まだ十才になるかならないかで描いたという頭をひくくさげて、前足をふんばり後足の筋も目立つほどに土をけつてうなる犬の絵など、並でない力を感じさせる。

貧しい牧師の息子ではあったけれど、父親から神に対する誠実さだけは、身にあまるほどに受けつぎ、かえってそれが晩年に至る狂気の世界に身を沈める動機になっているといえるかもしれない。

若くして家計を助けなければならぬ状況が彼を必然的に絵の世界に導き、画商になろうと絵に接する。けれども彼は貧しい炭坑の町の教師として、身も心も寒々とした人々にささげようと努力する。彼のひたむきな情熱を貧しい町は理解することができず、最後に、はじめから愛し続けていた絵の世界に自分をかける。

郵便配達夫を描き、浮世絵に魅せられ、ひまわりを描き、春先きのアルルを描く。

そんな中に『はね橋』の絵がある。それは黄色くて明るい。

何年もの風に、雨に耐え続け、今はね上る必要もなく静かにひっそりとそれは存り続ける。その下を船が激しく行き交った当時の、はなやかさをしのぶものはやなく、ただはね橋の鉄線の強さが物語る唯一のものかもしれない。

風が通りぬけると、はね橋はどうかしたはずみに、泣くような音をたてるかもしれない。真夏の、あまりにも明るい太陽のもとで、このはね橋は、何

をうったえようとするのだろうか。彼はこの対象に何を
見たのだろうか。なすべきことを全てしおわった安らぎを
彼はこの橋に見いだしたのであるか。

彼はこよなくはね橋に心をよせていたという。」

これは私が所属しております、「伸びる児童文化研究
会」で創作の勉強の折、指導者から「ふしぎな橋」とい
う題を出され二十分程でまとめたものです。「ふしぎな
橋」というイメージが、なぜゴッホの「はね橋」の絵に
重なったのか、よくわからないのですが一気に書いたこ
とを思い出します。

私はゴッホに魅かれます。映画や演劇や画集や書物な
どで、随分なじみ深いのですが、この『ゴッホ』（小川
国夫著 平凡社）がことのほか好きです。この本によっ
て、さまざまな喜びを得ることができました。

表紙はうす茶のくすんだ布張りで、ヴィンセントとか
た押し文字が、ななめに走っています。見かえしはゴ
ッホの木のデッサンです。本の文字は茶色であたたかさ
が感じられます。内容は、小川氏がゴッホが生きて歩い

た町々を、ゴッホの時間にそって訪ね、その町の印象、
絵のこと、ゴッホの精神性について語られているもので
す。もちろんゴッホがしたためたあの手紙も軸になって
います。

小川氏の語る言葉は、短かく鋭く、それでいてゴッホ
をこよなく愛するあたたかさに満ちています。

話は生れ故郷であるズンデルトからはじまります。

ザッキンの肩をよせあう、憂いに満ちたゴッホとテオ
の銅像の紹介―葉の写真―に続いて弟テオとのまれな
兄弟愛について語られます。私はこのザッキンの像を見
ているだけでこみあげてくるものを感じるのです。

「……ゴッホの死んだ兄の墓はどこにあるのだろうか。

彼の兄は彼より丁度一年前、同じ日に死児となって生ま
れ、ヴィンセントと名づけられた。名前も彼と同じだっ
たわけだ。で弟ヴィンセントは兄ヴィンセントの墓を見
ながら育った。少なくとも毎日曜日はこちらに来た。幼年
ゴッホはどう思っていたらうか。やがて彼にも弟ができ
る（テオの誕生は無意識ながら彼をその負い目から救い
出したのかもしれない。その誕生をうれしく感じて、こ
れが二人の間の友情の基礎となったのかもしれない。）そ

う彼の甥のゴッホは書いてある。まれな兄弟愛の源にはこうした事情があった。……すでに死んでいた兄が地下からそれを強める役を果した。」小川氏はこう語っています。

ゴッホを想うとき、弟テオのことをぬきにしては語れないということには気づいていましたが、死者がそれより強めていたという言葉は、新鮮な驚きと共に私に迫ってきます。ゴッホは自己に目覚めはじめるその時に、死を意識しなければならなかったということについて――

ズンデルトの章ではこの他、ゴッホの中に故郷がどんなに大きな力をもっていたか、肉親の愛情、最後のテーマになった麦畑のことなどが語られます。そして後はゴッホがたずねた町がそれぞれの章になり、その町の名の下に副題がつけられています。

たとえば、ハーグ 交信の約束、ロンドン 初恋、エッテンハーグ 閃光のように、パリ 乱反射、サンレミ 牢獄の豊饒、オーヴェール 人を強めるもの、というように。

小さな副題を見ていくだけで、その時ゴッホの心で何

が起ったのかを想像することができます。前記しましたがゴッホが弟テオとのまれな兄弟愛で結びついていたということも、小川氏の言葉はある深さをもって私を納得させます。絵と同じほどに自分をかけたテオへの手紙、そのきっかけになった言葉を小川氏は二伸目に見い出します。そしてそれに続く言葉が心のこりります。

『僕はとても喜んでる。これからはお前と同じ仕事を、しかも同じ商会の社員としてやれるんだね。これから僕たちはお互に、たくさんの手紙をやりとりする必要ができてくるんだ。……それほどゴッホの〈土〉は良かったのだ。私が今〈土〉と称んでいるものは彼に深く喰いこんでいた故郷、或は肉親ということだ。更にいい変えるなら、彼の無意識の時代といってもいいだろう。そこは人間らしい優しさと活力がみなぎる沃野であった。だが、この野に下ろした木は、育つべき召命があったがために、苦しまなければならなかった。輝かしいと同時に無惨な試練が待ち構えていたのだ。』

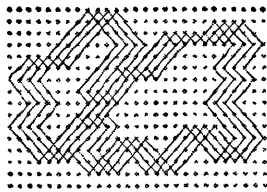
小川氏がゴッホを従う人としてとらえている、そのことに私はとても共感します。私自身、生を「使われて在る」という以外のとらえ方ができないのです。ゴッホと

は比較の対象ではありませんが、人間の生をどのような視点でながめるかということで、私は小川氏のまなざしに信頼をおくのです。

最後に死のことについてふれたいと思います。この本の中で、ゴッホにとって伝道も手紙も絵も等しなみに大きいとのべられています。彼に宗教への関心がなかった筈はなく、視点は一点にむかっていた筈です。にもかかわらず自ら死を望んだということが、ゴッホに魅かれた理由の一つでした。小川氏の力をかりながら、このことを考え続けていますと、少しわかる気がします。ゴッホにとって宗教的な願望は絵を描くことと等しいのです。絵を描き続けることが生きていくことの証しだったのです。だから絵が描けなくなるというおそれは、同時に宗教的な願望を絶つことであり、生そのものの意味を失くすことだったのです。ゴッホにとって絵を描くことが全てだったのです。ゴッホの「麦畑」、「ドービーニの庭」、「はね橋」みんな好きです。これらの絵はたしかに「人を強める」絵にちがいありません。どこに、何故そんな力があるのか、私はもっとわかりたいと願います。

ゴッホの死と生は個人的なものではなく、普遍性をもって私に関わってきます。あまりにも明白な限界としての死を見つめることなしには、生は考えられないからです。そして死の瞬間にはそれほどの意味はなく、どのよう生きたくかが問われるべきだと思います。しかし、ゴッホは引き金をひく瞬間、平安であったのだろうか、それとも……。

(大阪市・長居幼稚園)



安井稔著 (1977)

『この道を歩く』(開拓社)

1,800円

郡司利男編 (1983)

『庭前の梧桐』(開拓社)

〔非売品〕

原口 庄輔



『この道を歩く』と『庭前の梧桐』は師弟の関係にある安井稔筑波大教授と郡司利男筑波大教授の還暦のお祝いの一環として刊行されたエッセイ集である。それぞれ独自の趣きと味わいをたたえた、興味ある書であり、得るところの大きな知恵の泉である。

「ことば」の専門家による、ことばの使い方の二つのお手本であると言ってもよいであろうし、味わい豊かな安井語録・郡司語録の集大成と言ってもよいと思う。

『この道を歩く』は求道的香りがほのかにただようエッセイ集である。「この道」というのは「学問の道一筋」ということである。題に著者の信念と姿勢がくっきりと映し出されている。

戦前からのリベラリストであり、学者にとってはつらく悲しい、「失明」の危機に何度かさらされ、その都度乗り越えて生きてきた著者は、疑いもなく意志の人である。しかも、今なおやわらかでのびやかな精神を保っており、人を育てる達人でもある。

『この道を歩く』には、著者が四〇年に亘って書きためてきたエッセイが収められており、一言一言に、学問をする上で、また、人生を生きる上で有益な知恵がこめられている。

例えば、本を読むとはどういうことをかを説いた一文は、「本の読み方」ではなくて、「本のよこし方」となっている。そのわけは、「時間を掛けて読むべき本を、まさに時間を掛けながら読む最上の方法が、本をよこしながらから読むことである」というところにある。よこし方とその効用について読んでいるうちに、よこしながらから読むべき本を、どれ位読んできたかということが、おのずから反省させられるのである。

「とにかく暇は大事である。大事すぎて何に使うのも、もったいない。」というくだり

を含む「暇の効用」という一文は、とかく忙しいわれわれにとつて、重要な警告である。「勉強している時間が同じであれば、暇な時間の多いの方が行末伸びる。」というくだりは、アルバイト・パートタイム等で大切な暇を切り売りしている者に、これだよいかと考えさせずにはおかないであらう。

『卒業論文』と題する一文では、よい卒論（に限らずあらゆること）を仕上げる際に重要なことは、「時間をかける」ということであると述べている。これは、アイデアを発酵させるということが重要であるということと同時に、かけた時間にいろいろと考えをめぐらせることが、積りに積もって膨大な量の蓄積となるからである、という。

このような言葉は、すべて著者自身が身をもって実践し、折にふれて学生に示してきたものである。その一言一言が心にしみ込む重みと不思議な説得力をもっている。

『庭前の梧桐』というエッセイ集は、人間郡司利男を語るという趣きの書である。編者みずからの手になる自画像と、いろいろな時期に交遊のあった歴々が、ユーモアと学問への情熱のカタマリのような郡司利男像を鮮明に描き出している。

山奥の小学校を出たのち、編者が貧しさをものともせず、学問への情熱の火をたやすことなく燃やして生きてきた様子が鮮か

に、ユーモラスに語られている。下手な「成功物語」を読むよりはるかにおもしろく、学問をする上で、また、人生をいかに生きるべきかを考える上で、きわめて有益である。

編者は小学生の頃「授業時間に用を足したくなって、机のところでズボンもさるまでも脱いで出ていったところ、みんなが大笑いしたが、なぜ笑われているのか、さっぱりわからなかった。」という反面、あの戦争中に学徒動員でかり出されたがら、「死んでたまるか」と知恵をしぼった、というように、人とは違う視点から物事の本質を見ることが出来る人生の達人であり、マルチ人間である。このような編者の手になる本書が人生や子育てのヒントにならぬ方がおかしな位である。

本書はもともと非売品であるが、仲間うちで終わらせるにはあまりにもおしいので、あえて取りあげた。幸い残部も多少あり、御希望の方には郵送料・手数料等を含めて千円を添えて申し込んでいただければ、おわけできると思う。（申し込みは左記まで。）

305 茨城県新治郡桜村並木2丁目103-102

原 口 庄 輔

なお、編者の郡司利男氏には、『三等学部長』（こびあん書房 2000円）というシャレたエッセイ集もある。あわせて一読をおすすめしたい。

（筑波大学）

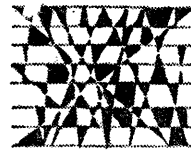
緑蔭図書紹介

『ユートピアだより』

『香亭雅談』

『鯨の腹の中で』

菅原啓州



界で、為すに値する仕事に心楽しく携わる人びとが住む。自然は麗しく、人の肌はつややかで、目は輝き、人が身につけるものは質素だがみごとな工芸品で、住居も町も、生命が通い、人間の生活によりそう……、そんな世界が目に見えるように描き出される。とりわけ主人公が遡るテムズ河の描写が美しい。

この三冊をひとまとめに挙げたりすると、誰よりもまず、今はこの世にはない三人の著者が、地下で絶句するに違いない。

『ユートピアだより』は、詩人であり社会主義者であり美術工芸家であり造本芸術家であったウィリアム・モリスが一八九一年に出版したユートピア小説。ある朝目醒めると、モリス自身らしい主人公は二十一世紀の理想郷にいる。資本制を脱し、機械文明の害毒も洗い落した世

論ということになるうか。しかし、これは「論」ではなくて「ひとつの世界」なのであって、作品の中を吹く薫風に身をゆだねて、細部を享受する類のものなのだ。そうすると、実現不可能であるということ自体が、今は、激しい照射力と浮揚力をもつことに気がつかされるのである。

『ユートピアだより』は、岩波文庫版（松村達雄訳）でも中央公論社版（世界の名著、五島茂、飯塚一郎訳）で

も、簡単に手に入れることができる。逆に、『香亭雅談』は、今のところ図書館で読むより他に手はない。(特に明治十九年に金港堂から発売された木版和装二冊の美しい初版を手に入れるのは不可能に近く、大正九年に芸苑叢書の一つとして再刊された和装一冊の活字体であれば、まだしも古書展などで手に入れることもできるが、こちらは極めて誤りが多い。)

二百三十篇ほどの短い漢文の随筆集で、近世の詩人・文人・書家・画家・音楽家・浮世絵師・巷の芸人などの逸話が、心のおもむくままに語り継がれた万華鏡といった趣きの本である。近世随筆の伝統をまっすぐに受け継いで、それを簡潔平明な漢文にのせた好著である。山陽風の和臭の強い文章だから、漢文が得手でない、私のような戦後世代でも、辞引を片手に、充分精読できる。

文芸史家や伝記作家の本などに、たまに書名が出てくるくらいに、忘れ去られている本だが、これを敢えて挙げるのは、回顧趣味からでも、書誌学上伝記上の好資料だから、というわけでもない。今日のわれわれの社会

が、その出発点で、どのような精神のかたちを失うことによって、今このようにあるのが、鮮明に見えてくるからである。近代の個性の毒に犯された眼には、埃をかぶった旧弊な遺物のようにしか見えなかった人々が、一人一人生き生きと眼前するのはそれだけで楽しいが、こうした人たちが一処に生かされる風雅の空間は、言葉のもっとも貧しい意味で「具体的に存在した」のではなくて、風雅を解する眼と精神があって初めて、そこに「存在」する無可有郷であることを教えられるのである。

著者の香亭中根淑は、モリス(一八三四―一八九六)とほぼ同時代で天保十(一八三九)年生まれ、維新の年を二十九歳で迎えた旧幕臣である。文武に秀で、幕軍の一員として鳥羽伏見で破れ、江戸に戻っては主戦を唱えて脱走、維新後には沼津兵学校の教官から陸軍省に出仕させられ(明治八年致仕)、明治十九年の文部省編輯官辞任をもって、近代日本の進路からスラリと身をおろして、詩文の世界に遊ぶ。『香亭雅談』はその明治十九年の夏に上梓されたものである。初版から欄外に依田学海

の評（時には評に対する香亭の評まで）を付して、風趣のデアレクテイークを内蔵したユニークな本でもある。

なかなか手にしにくい本なので一篇を紹介してみた。『雅談』全体を凝縮したような部分は、前田愛氏が「荷風における江戸」（『鎖国世界の映像』所収）の中で、かなり長く引用されているので、それを見ていただくとして、ここでは香亭の好みが強くて出ている一篇を紹介する。

勝田獻寧成信居四谷家至貧著貧政一卷文章警拔理致高邁余甚喜之今舉其二。曰一切物從其有無自有所宜故米穀足則爲飯不足則爲粥甚不足則糝之以蘿蔔蹲鴟之屬乃他人一日之食余三日食之而有餘又曰衣服用草綿破則補焉大抵五年而新之若不能新之則就帶董市買故衣因想是必狂生換酒者今復伴斯癡呆者日蒙硯頭塵不知是何因緣也龔瓦石以錦綺繡緞人誰不笑之容我迂愚

之躬難衣藤帶而足矣又曰窓頭則一几一硯一
刀一墨筆管止于兩三莖紙箋止于數十葉
不足則以庭上芭蕉補之廚下則一壺一杯一
鐺一甕彼是兼用但酒茶具忌相兼兼則兩失
氣味儲磁器一二而可矣又曰床頭恒置一瓶
挿時花數本則香氣自滿坐若微風入窓片英
落研則和墨磨之臨法書兩三行覺字字有花
氣入盃則直莽腹中肝腸亦馨經數日花瓣落
盡更挿新花無則猶留空枝譬諸落飾美人雖
無紅粉粧自有天然妙姿勝空瓶萬萬

そして、ここに付せられた依田学海の評は、

僕嘗讀友野霞
舟貧政序愛之
不圖今讀其一
則果奇書也

『鯨の腹の中で』は、『カタロニア讃歌』『動物農場』

『一九八四年』などの作品で知られるジョージ・オーウ

エル（一九〇三―一九五〇）の一九四〇年の評論である。ヘンリー・ミラーの『北回帰線』の書評の形をとったかなり長い評論だが、その成立の事情を越えて、現代の日本の状況を、これ以上みごとに照射しているものはない、というふうに読むことができる。

評論の躰にあたる部分を引用すると、

「……鯨の腹ともなれば大人でも充分入れる胎内である。その暗く、体の大きさにびったりのふわふわした場所に座りこみ、厚さ数ヤードという脂肪で現実とへだてられていれば、何が起ころうと完全に知らん顔でいられる。世界中の軍艦を沈めてしまうほどの嵐もかすかなこだまとしか聞こえないし、鯨の動きそのものさえ、伝わってはこないだろう。海面の波のあいだでのたうっていようと、真暗な海中ふかく下降しようと……その違いもわかりはしまい。死んでこそいなくても、これこそ最終的、最高の無責任状態である。……ミラー自身はあきらかに鯨の腹の中にいる。……彼のばあい、鯨はたまたま透明なのだ……」

（小野寺健訳）

オーウェルの原文は小気味よいほど平易で明晰な散文

だから、わかりきったことさえ難解に書く、知的「風習」の根強い国に住むわれわれは、ペンギン版で簡単に手に入るの（*Inside the Whale and Other Essays*）、英語で読んだほうがいいかもしれない。しかし、最近岩波文庫の一冊となった『オーウェル評論集』（小野寺健編訳）には、「象を撃つ」「絞首刑」などの珠玉の短篇小説ともいべき評論（？）や、周到緻密なディケンズ論などとともに、秀逸な選択、平明な訳文で収められていて、簡単に手に入れることができる。

これを、『一九八四年』（これは早川文庫版で手に入る）という、失敗作だが、虚心に読めば身につまされることのアマりに多い逆ユートピア小説と対照させつつ読むと、はじめに挙げた二書との隠れた相関が見えてくると、私には思えるのだが……。

（蛇足 どうしても漢文がいやだという向きには、吉川弘文館の続日本随筆大成の第四巻に中根香亭の和文随筆『醉迷餘録』『零碎雑筆』『塵塚』などが、収録されていて、こちらは簡単に手に入る。）（福音館書店編集部）

編集者のいるかもしれない宇宙

松田 徹

リーマンたらんと欲し、かつ現実にもそのように行動しなくてはならない。いうまでもなく、時間と服装の両面にわたって規律正しくしなければならぬ。現実に出世する編集者はみなそのようにふるまっている（はずである）。決して酒を飲むなどとはいわないが、泥酔の頻度と程度も一般サラリーマンなみであることが切に希望される。

世の中にいろいろな迷信があるなかで、編集者という人種は本を多量に、しかも超絶的なスピードで読みこなし、本についての情報ここに集中せりといった風情でたたずんでいるというそれは、今なお根絶されているとはいえない。いささか困ったことである。そんな編集者は全くいないとはいわないにしても、まずめったにお目にかかれるしろいものでないことは断言しよう。

今さらいうのは気はずかしいようなことだが、編集者とはサラリーマンの一亜種である。二世紀も間近にせまったエントロピー時代、編集者はひたすら一般と何かかわるところのない純正サラ

ではない。実をいえば昔からそんな編集者なんていたためしはなかったのだ。

それでは編集者という職業は何によって定義されるのだろうか。本に対する構えや知識の量によってか？ そうではあるまいという予断を今のべた。それではいったい何によって？ 本に対する知的感度や知識の量と質、いずれにおいても読書好きの一般人の方が編集者にまさっているし、その傾向はもはやおしとどめるすべもなく進行中のようにみうけられる。職業による痴鈍化はそれほどまでに編集者の精神をむしばんでいるのだろうか。

編集者に独特な本の読み方というものがあろうかどうかは知らないが、そんなものはないとはつきり言い切ってしまうこともできないように思う。最初の数ページ（あるいは、はしがきやあとがきのみ）を読んで、あたかも全体を読破したふりをする（こと、たまたま見知っている著者や出版界の裏話を小出しにして事情通をよそおうこと等々をふり出しに、総じていえばいかにあざやかか）に本に詳しいふりをするか、この演技によって編集者という職業のかんりの部分は支えられている。まじめな話、私はこの種の演技こそ編集者を編集者たらしめる最も重要な要素であると思っている。しかし、この「ふりをする」演技は、少なからずある種の勘と想像力の作用に裏打ちされている。だからこの演技は、「見立て」や「もどき」に類する心の働きをごく当然のこととして含みもっている。編集という作業は芸能であり、編集者は読み物という見世物を組織し演出する遊芸民なのである。

ところで、拙宅の長椅子のまわりには常時三〇冊前後の読みかけの本が雑然と積み重なっている。読みかけとはいってもその程度は千差万別なのであるが、ちなみに五月八日現在のその本たちの顔ぶれは正直に書けば、次のとおりである。（雑誌はのぞく。また、配列には何の意味もない。）

- 岡本綺堂、明治劇談ランプの下にて
- エンツォ・ピアージ、新イタリア事情（上・下）
- 黒田壽郎（編）、イスラム辞典
- Louise Brooks, *Lulu in Hollywood*
- Walter Pater, *Imaginary Portraits*
- 中上健次、地の果て至上の時
- Ann Tyler, *Dinner at the Homesick Restaurant*
- ヴァルター・キアウレン、わが友出版人——エルンスト・ローヴォルトとその時代
- ベルリオーズ回想録（一・二）
- George Antheil, *Bad Boy of Music*
- 山田風太郎、エドの舞踏会
- 森川久美、南京路に花吹雪（一〜三）
- Philippe Beausant, *Versailles, Opera*
- エミール・パンヴェニスト、一般言語学の諸問題
- 狩撫麻礼（作）・谷ロジロー（曲）、ライブ・オデッセイ（一〜三）
- Thérèse Moreau, *Le Sang de l'histoire*
- マルセル・ドゥティエニス、アドニススの園
- 出口裕弘、ロートレアモンのパリ

- William Graham Sumner, *Folkways*
- 張樂平、三毛流浪記選集
- Frank McConnell, *Storytelling and Mythmaking*
- Gregor T. Goethals, *The TV Ritual*
- ロバート・ヴェンチャーリ、建築の多様性と対立性
- 斎藤緑雨集（明治文学全集）
- 勝俣鎮夫、戦国法成立史論
- トマス・ハーディー、諸王の賦
- ブルノー・スネル、詩と社会——社会意識の起源に対するギリシャ詩人の影響
- イブリン・ウォー、ブライズヘッドふたたび
- Michael R. Booth, *Victorian Spectacular Theatre 1850—1910*
- 中野嘉一、前衛詩運動史の研究——モタニズム詩の系譜
- T. Hachtman, *Gertrude's Follies*
- Philippe Aries, *The Hour of our Death*
- マリージョゼ・バルボ、知りたがらない日本人——フランス人の見た部落問題
- 孟元老、東京夢華錄

ここにこう書き出したものを見直すと、私自身あらためて一種

の衝撃をおぼえないわけにはいかない。あまりにも支離滅裂でないことに対してである。それに新刊本が圧倒的な部分を占めていることもやはりシロクである。空間的な広がり、時間的な深さ、そのいずれをとってもこの書目がきわめて片寄った狭いものであることは歴然としている。

が、よくも悪くもこれが今現在の私の魂のかたちである。本に換算された魂のかたちである。(ついでにいえば、魂は本に換算することができるという前提の上に編集者という職業はかろうじて成立しているのである。) この魂のかたちは流動している。新陳代謝をしている。というのは、読み終えられた本や読み続けるのをきっぱりと拒絶されてしまった本たちは、これから読まれるはずの本たちと次々に入れかわることになるからである。こうしてこの集合は、体重を多少増減させながら、太りすぎもせずやせすぎもしないで生きつづけていく。この新陳代謝をおこなう流動体は、いわば原形質なのである。これは単なる比喩以上のものである。なぜなら読書という行為は、結局無機物を有機物に転化させる原形質の生の営みのプロセスに等しいといえるからである。著作者の脱け殻あるいは排泄物ともいふべき死物としての本を、生き返らせ血肉と化するのには読者による読書という行為なのである。本というものが、いつの間にか増えて、インベーダーのよう

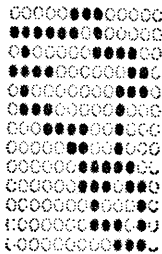
に空隙を侵し占領するようになるのも、本の集合体が自己増殖をする原形質だからなのである。私は一冊一冊の個性的な本ではなく、この種の匿名性の衣をまとった本の集合体を基本的な単位としたコミュニケーション読書論が構想されなくてはならないだろうと考えている。

さて、三〇冊を越える本を同時に併読することはそもそも可能なのか。もちろん可能なのである。いうまでもなく、可能なように適当に手を抜いて併読するからである。人間は不可能を可能にするべく運命づけられた生き物であるなどと大仰なことをいうつもりは毛頭ない。しかし私にだって本当をいえば好きでたまらない本の二冊や三冊はもちろんあって、そういう本はそれこそなめるように何度も読み返している。だが、いかに人に読まれる可能性の絶無に近い雑誌とはいえ、そんなプライベートの核ともいえるべきものを公表して、自分の魂の深奥部を白日のもとにさらけ出す気にはとうていなれない。せいぜいあたかもたくさん読んでいるふうをよそおって書目を示し、魂のかたちの輪郭をあらわにするばかりである。

だが輪郭を示すだけの手抜き読書法にも、それなりの利点がないわけではない。体調、機嫌ともによく、ついでに天気もよく、さらには酒や食事がよかったりすると、あまり恵まれてはい

ないはずの勘がどういわけか妙にさえて、思わぬアイデアを産出することがある。つい先日それがおこった。劇画『ライブ・オデッセイ』と『イスラム辞典』を併読中に、突如すばらしい構想が浮んだのである。それがいかにスリリングな興奮に満ちた名案であるかをここで大衆的に判断していただけないのは不幸というべきか幸いというべきか。何しろご存知のように、サラリーマンの社会には守秘義務という大きな壁がそびえているのである。

(三省堂出版局)



ミシエル・トゥルニエ

『フライデーあるいは太平洋の冥界』

中村 弓子

フランス文学はあくまで人間臭い。もちろんその中にも自然が大きな位置を占める作品がないわけではない。

例えばバルザックの『谷間の百合』におけるアンドル河、そしてモーリヤックの『テレーズ・デスケルー』におけるランド地方の松林など。しかしそこで自然は登場人物の内面と緻密に照応しあうものとして、究極のところは内面にくりこまれるべく描かれている。「女性のなかの花ともいふべきあのひとが、この世のどこかに住んでいるとすれば、それはきつとここだ、ここにちがいはない」と『谷間』の主人公フェリックスは叫び、『テレーズ』は夫に向かって言う。「私はこの荒れはてた土地にかたどってつくられた人間です。渡り鳥と、野猪以外に生きているものがない土地が私の姿です。」

ところが、自然が人間と根本的に異質なものとしてその裸の姿を顕し、むしろ自然のほうが次第に人間を変貌させてゆくという話が現代のフランス文学の中に現れた。森林の羊歯、椰子、月桂樹、空に舞う秃鷹、岩場の蛸、亀——自然に親しむ季節でもある夏休み

の読書にふさわしい本としてご紹介するのは、ヌーヴォー・ロマン以後の現代フランス文学の雄ミシエル・トゥルニエ作『フライデーあるいは太平洋の冥界』（岩波現代選書）である。

この小説はデフォーのあのあまりにも有名なロビンソン・クルーソー物語のパロディーでもある。本来ロビンソン物語とは、人間の（そしてまた西洋的）合理性の秩序をもって自然の無秩序を制御する、という話である。そしてこの小説の主人公もまずはロビンソンらしく、島の

自然を管理しようとする。しかし両者の葛藤のすえ、この小説ではそれが逆転されてしまう。

小説の冒頭に非常に象徴的な場面がある。島に打ち上げられた主人公はジャングルを偵察しに入ってゆく。「枯れて腐った木の幹が折り重なって山をなしていたので、ロビンソンはあるときは植物のトンネルの下を這い、またあるときは自然の歩道橋の上を歩くように数メートルの地面を進んでいった。」真直ぐ道を進むことができず「トンネルの下を這ったり」「歩道橋の上を歩」かざるをえないのは、裸の自然にぶつかって西洋的合理精神そのものごとくである。そのあとロビンソンは行く手に異様な格好の根株を見つける。しかし森の緑の薄明りの中でそれは少しずつ、毛の長い野生の山羊に変貌する。じっと動かないこの山羊をロビンソンは恐怖心からやみくもに殺してしまうのだが、合理的認識というものとの問い直しを大きなテーマとするこの小説においては、結局ロビンソンの眼に山羊は再び根株に戻ってゆくのだと言えるだろう。そしてロビンソンはそうしたありのままのものとしての自然と合体する。

すべて異質なものととの合体とは広い意味で愛である。

だからこの小説は合理主義の問い直しの小説であると同時に愛の小説となっている。

小説のプロローグ、嵐で横揺れするヴァージニア号の船室で船長がタロット・カードを使ってロビンソンの未来を占う。出たカードを講釈したあと船長は、この占いは一種の暗号であり、ロビンソンの「生活」の実際の出来事がそれを解読するだろう、と言う。しかし『フライデー』というこの小説そのものが一つの新たな寓話として読者の「生活」に投げかけた暗号となりえている。その暗号の射程は非常に広い。合理主義精神に対立する自然、というのがその読み取り方の一つである。——ところで我われ大人にとつての子供の世界とはいったい何だろうか。それはもう一人のロビンソンの前に拡がるもう一つの野生の島ではないだろうか。『幼児の教育』誌の読者の方々にこの本をご紹介する本当の理由はそこにある。

(お茶の水女子大学)

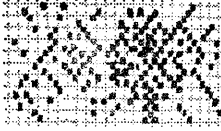
デズモンド・モリス (1928—)

白井尚之訳

『サッカー人間学 マンウォッチングⅡ』

小学館 A4判 320 ページ

1983年 定価 4,800円



遠藤 保子

この本は、一九七七年に出版された「マンウォッチング」の姉妹編ともいべきもので、サッカーを通して「人間とは何か」を考えさせるユニークな本である。

著者デズモンド・モリスは、前書「マンウォッチング」の中で、人間の動作、しぐさ等の身体活動を理解しながら、人間行動に関する予測性を高めようとした。というのは、人は言語に重点を置きすぎ、動作や姿勢、表情が何を語っているのか忘れがちになるという反省にたつたからだ。

人間の行動を観察する対象としては、種々の動作、ジェスチャー、変異されたジェスチャー、様々な信号、身体装飾、遊び、スポーツ行動等があげられている。

そして、今回「サッカー人間学」では、スポーツの中でも、特に盛んに行なわれているサッカーに焦点をあて、深化した知見を述べている。

このように、人間の行動を対象として研究している学者は、モリスの他にドイツではアイベル・アイベスフェルト、その弟子ハイデ・シュブレスニー、日本では、多田道太郎、香原志勢らがいる。「サッカー人間学」とあわせて、彼らの著書も読めば一層興味深く、人間の行動を把握することができよう。

また、人間から動物の行動に目を向け、コンラット・ローレンツや、モリスに多大な影響を与えた、河合雅雄等京都大学霊長類研究者達の著書も参照、比較すれば、人間行動の特異性を浮きぼりにしながら、巨視的にいうと、「人間とは何か」の問いかけにひとつの回答が得られそうだ。

モリスは「マンウォッチング」の中でスポーツ活動は、本質的に、狩猟行動の形を変えたものだとし、生物学的に見て、現代のサッカー選手は、姿を変えた狩猟者の群れと

みなしている。

本書でも、この考えを基調にしながら、サッカー集団を部族の概念でとらえようとした。

これは、サッカー活動のそれぞれの中心、つまり各サッカー・クラブは、小部族にも似た組織をもち、部族のなわばりがあり、長老呪術医、英雄、同調者、その他の部族民をすべて抱えているということだから。

そこで、著者モリスは、部族のルーツをさぐることから始め、儀式、英雄、装飾、長老、随行者、言語と七項目にわたって論を展開し、サッカーの全貌を明らかにしようとした。

サッカー部族のルーツは、狩猟を生業（なまわ）にしていた太古にさかのぼりながら、ルーツのたどる道程には四つの主な過程があった。

第一に、生存のための狩猟期で、これは人類の太古の先祖が死活問題として、狩り出しと屠殺を行っていた時代である。第二に、スポーツとしての狩猟期で、これは人類が食料を求めて狩猟を行なう必要がなくなった後も、なお狩猟での活動を続けていた時代である。第三に、円形闘技場が舞台の流血スポーツ期で、この時代には狩猟が原野から都市に移された。最後に、競技場での球技スポーツ期が訪れ、昔から流血をとまなうスポーツが近代球技にかわった。

このように殺傷力のある武器は無害なボールとなり、獲物はゴールに変化はしたものの、サッカー選手は、狙いが正確で、得点できた時には、獲物を殺した狩猟家が味わう勝利の喜びを得るという。

狩猟からサッカーへという変遷過程で最も重大な要因として、生産形態が農耕へ移行することが挙げられている。つまり農耕をするということは、狩猟が廃棄されていくことを意味するからだ。

しかし、狩猟技術と狩猟への衝動は残存していて、スポーツのための狩猟とか、古代ギリシアの運動競技にみられるような狩猟とは異なる、別の行動パターンに変形してくる。

ただ、古代ギリシアの運動競技の発生論に関しては、体育学者のユニットナーやガードナーらが、競技をすることは神が裁きをするからだ。とか、他民族（ドーリア人）が先住民を支配していく過程の中で競技が生まれてきた等々を指適しているので、狩猟の観点からだけでは説明されえない。

いずれにしても、サッカーのいいまわし、例えば、選手がゴールを「襲い」、ボールをゴールに「放つ」等の表現は、見せかけの狩猟としてのサッカーの本質を明かす重要な手がかりになる。

サッカーは、儀式的狩猟の顔を有しながら、様式化された戦闘として、地位ディスプレイとして、宗教儀式として、社会的興奮

劑として、ビッグ・ビジネスとして、そして劇場公演としての様々な顔を有している。

これらの顔を紹介しながら、部族の儀式―掟、なわばり、タブー、罰、戦略、戦術、中心儀式、クライマックスとしての得点、勝利の祝いを問題視していく。

さらに、サッカー部族の花形選手達は、庶民の真の英雄ではないかと問いかけながら、英雄が生まれる背景、人格、練習や指導法、英雄がもっているお守りやおまじないに目を向ける。

こうして話は、装飾（ボールやサッカー選手の服装の変化）や部族の長老、つまり神経中枢部に匹敵する理事会、理事会にとつて恐怖と畏敬の的であり超然と威敵を保っている部族の裁判官（レフェリーとラインズマン）へと展開していく。

テーマのユニーク性もさることながら、サッカー独特の動作や姿勢を撮った写真も豊富に掲載されているので、パラパラめくって写真だけをおつても楽しめる本だ。

私がこの本を本欄でとりあげようとしたきっかけも、実はこの写真をみたことにある。部族民の写真と中世、現代のサッカーの写真が、鮮やかな対比となって、現代にくすぶる部族性がうきぼりにされているのに、ハッとしたからであり、こういうテーマのとらえ方があるのかと驚いたからでもある。

私は、この本に載っている部族民の写真をみるにつけ、又、サッカーの様々な動作写真をみるにつけ、今まで私が現地調査してきた部族民（ヨルバ族・ナイジェリア）の動作を思いおこしていた。

肯定の返事をする時、一般的には首を上から下に振りおろすが、ヨルバ族では、下から上つまり首もたげをする。モリスの本では、首もたげ（||首しゃくり）はギリシア人の否定とあり、ギリシア及び元ギリシア植民地の地域で、否定を示す動作特徴とされている。

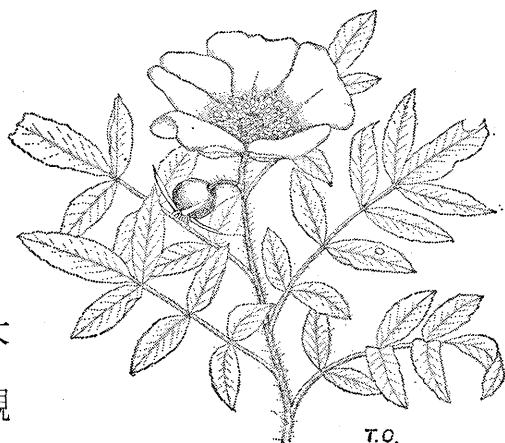
更に、ややこしいことに、ヨルバ人は、否定疑問文に対して否定の回答をする時、日本語の発想と同じく、まず“はい”といつてから、“…ない。”と答える。

もし、ヨルバ人が、首もたげをしながら、“はい。…ない”と本書の書評をした場合、著者モリス（英国人）は、彼の返事をイエスととるのだろうか、ノーととるのだろうか。

動作ひとつにしても、不思議な発見ができるようだ。この本を布石として、今まで気がつかなかった、隠された人間性に新しい光があてられたらすばらしい。

（お茶の水女子大学）

幼少時の思い出、あれこれ



T.O.

大槻虎男

奥尻島の自然

私は満六才から小学校を終えるまで、北海道の僻地に住んだ。生活環境は自然が豊かで、子供たちの遊び場も大地——野、山、川、海——そのものであった。

明治四十一年の暮、住みなれた宮城県を後に旅に出た私たち一家は、函館に着いて、そこで貨客船東運丸(二〇〇トン)に乗り、二日がかりで途中江差港に寄港して日本海洋上の離島奥尻(面積一五〇キロ平方)についた。折柄のあらしで小さな船体は木の葉のように揺れた。大波に持ち上げられて、次に落下するときは奈落に沈む思いであった。

父はこゝに村医として招かれた。高台の病院からは港が一望の下に見渡され、海岸線と出入する船舶、漁舟はパノラマ

のように広がり、快晴の日には江差、瀬棚の山々が海の彼方に見えた。

当時の北海道は開拓途上にあり、通称蝦夷といわれ、奥尻島にも文化的香りは希薄であった。海岸には方々に日露戦争名残りの機雷の残骸が引上げられておいてあった。

島に上陸したのが十二月で厳寒期に入っていた。雪が深い、そして寒いというのが第一印象であった。冬の子供の遊びは道路スケータング。それは氷の張った池や湖はこの狭い島にはないので道路が行人に踏まれて、氷路となった上を滑るのである。スケート靴などもちろんある筈がない。歯のすり減った古い下駄の裏に反り身に削った竹片を釘で打ち付けて滑り用具とした。私も上手になって得意であった。道路にはかなり凹凸があって、足許を誤って転倒すると手をつけてよく怪我をした。

その頃の子供の服装は筒袖の和服で、通学のときは必ず小倉の袴をはいて、庇しのついた制帽を冠った。しかし漁師の子供にはひどい服装もかなりあった。洋服は駐

在所の巡察と学校の男の先生に限られ、珍らしかった。

北辺の冬は長い。家の中に閉じこもる日が多い。春の訪れが待遠しかった。

四月に入って、雪が山かげに少しばかりの白い雪斑として残る頃、子供たちは待構えたように、外に出て行く、その一つとして記憶に残るのは山うど探してある。

山麓の林の中に昨秋の枯葉が敷きつめてその上を歩くとカサカサと音を立てる。多年生の植物の芽が伸びて、枯葉の下にかくれている。勘を働かせ、見当をつけて、せいぜい一〇センチ足らずのうどの若芽を掘り出す。見付かると歓声をあげる。半日かかって十本足らずの収穫を家に持ち帰る。夕食の汁に入る。父の好物で、ほめてくれた。

海の幸も、冬の終る頃に始まる。

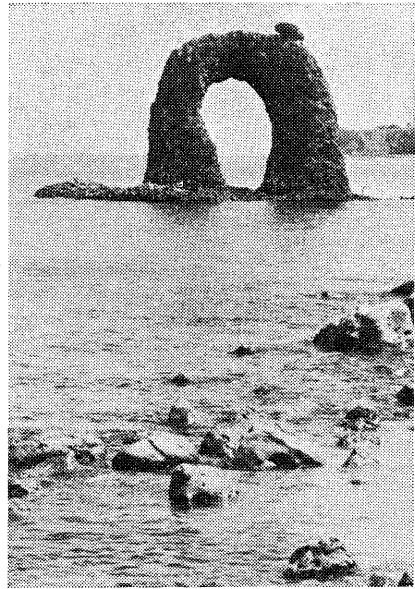
わかめは水際に氷が残っている寒い時のが柔かで、一番おいしい。干潮を見計って、岩の上にしゃがんで、海中に手を伸して引張り上げる。うみそうめん、ふのりなどの海藻類は冬から春までが生育季で夏になると枯れ

て行く。のどかな春の日、岩の上から海中を覗くと、褐藻を主とし、緑藻、紅藻がその間に点綴して、色どりがまことに美しい。磯釣りも春に始まる。

「いい漁師になるナア」と病院にとれた許りの魚を届けに来た漁師が真黒に陽に焼けた私を指して、母に云った。子供心に釣上手を賞められたと思って得意であった。私は磯釣りが好きで、就学の前からよく海岸に釣りに行った。ニシキベラ、フグはよくかかったが食用にならない。ウグイ、タナゴ、アブラコは食膳に上った。

北海道には竹が自生しない。竹竿は貴重品である。山に行つて、真直な木の枝を切つて来てこれに代えた。釣針とてぐすは消耗がはげしく、よく村に一軒きりない早瀬雑貨店に行つた。通帳で買うので何を買つたか親に知れる。ハラハラしたが父は釣り道具には寛大であった。おもちゃとか菓子など友だちが持っている欲しくなつたが厳禁されていた。

やがて夏になると泳ぎが始まる。見よう見まねでいつのまにか泳ぐことを知つた。いぬかきの自己流である。



奥尻島の奇勝 鍋釣岩

六月一日から子供の水泳が許された。砂浜は魚船の発着でよごれているので岩場の方が主な遊び場であった。

漁師の子供は多く、生れたまゝの丸裸であった。僕自身は越中をつけていた。水に入る前に耳に唾をつけた。海底の岩壁に多数のバフンウニがギッシリはまり込んでいる。潜水してこれを探り、石で殻を割って、黄色の卵巣を他の内臓から分けて取る。手の平に載せて海水で一瞬洗つて口に入れる。その味こそ天下一品である。六月にアワビが解禁になる。これは数が少く探し出すのに苦

劣する。殻に石灰藻がついて、岩と区別しにくい。見付けても迂闊に手をつけてはならない。危険を感じると岩にしがみついて、離れなくなるからである。殻がたたき割られても離れない。ソツと近よって、ナイフを岩と殻の間にさし込み、間髪を入れない早業で引離すのである。失敗したら岩を砕いて持帰ることもある位高価な海産物である。その頃私も一日に一個か二個探し出すのがやっとで、ナイフで殻から離して、その場で食べた。味といふ、歯ざわりの感触といい、えもいわれぬものであった。釣り、アワビ取りが一ヶ所で旨く行かぬと、漁場を変える。つい遠くまで行って、夕方になりあわてゝ家路につくこともあった。鍋釣岩という奇勝があり、奥尻島のシンボルとされるが、この附近の海岸も私共の漁場の一つであった。

「潮かおる北の浜辺の砂山のかのハマナスよ今年も咲けるや」は啄木が釧路の海岸で詠んだ歌だが、奥尻の海岸の平地にもハマナスの大群落が発達している。その間に造られた歩道を私達は郊外の小学校に毎日通ったもの

だ。淡いが独特な芳香があたり一面に漂った。バラに似た一種の低木、茎葉に刺がある。直茎二―三センチのピシク五弁の花をつける。花が散ると下位子房が膨れて果実となる。先端に五ヶの萼片が残留する、この果皮だけを取り出して食べる。甘ずっぱい味はとくに美味というのではないが友達の真似をして食べたものである。

家庭生活

夏休みに入ると、東京に遊学の兄や姉が帰省して、わが家は俄かに活気を呈した。東京から奥尻に二―三日を要し、その上旅費が多額に上った。父は年に一度夏季休暇だけはこれを工面をして、子供たちを全部親許に呼び寄せて短期間ながら年に一度の家族一同の生活を共にした。

父は安政六年に生れ、学問好きで、神童といわれ、漢学塾から蘭学を修し、西洋医学を学んだ、儒教的教養を子供にも求め、頑固一徹は接する人を恐れしめた。長兄が小学校の上級のとき、作文に甲の上の評点をつけられ



両親と8人の子供が夏休みに奥尻島に集まった。長女は嫁して不在。両親の間に立つのが筆者（6歳）。明治42年。

たので、喜び勇んで家に持ち帰り父に見せた所、いきなり「馬鹿」といわれ頬に平手打を食った、たゞ一字朱筆で直されてあった。

子供等は大きくなっても年に一度、父の厳格な教育を受けたわけだが、それよりも子供たちは辺境の僻地に苦闘する両親の生活を見て、強烈な印象を受けて帰った方が真の教育であったのかもしれない。

長兄は東大医学部、次兄は東京の中学、三兄は郷里白石の中学、長女は日本女子大英文を出て他家に嫁し、二女は東京の保母養成所にそれぞれ在籍した。小さい方の男子二人と女子一人が奥尻の小学校に学び、末妹は学齢前であった。長女を除く八人の子供と両親が一個所に集まったわけである。

父は午前は外来、午后は往診、帰宅すると薬剤を調査して、患家から来た使いに渡す。

父が往診に手間取って、帰宅がおくれると、子供等は空き腹をかかえて、父の足音を今か今かと待った。足音を聞きつけた一人が「お帰り」と叫ぶと家族全員が玄関

の前の畳の上に正座し、頭を下げて父を迎えた。

どんなにおそくなっても父が着座しないと食事が始まらない。父が一番目に箸をとる。盛り合せも父が取る前に食べるわけにはいかない。座る席順も父が上座で、男子、女子、そして年の順ときまっていた。木製の円い飯櫃は母の傍にあって、お代りの声に、母はろくに食事ができなかったと思う。

男尊女卑で、僕は得をしたことが多い。二才違いの姉とはよく喧嘩をした。悪口の言い合いでは到底姉の敵ではなかったが腕力を行使して姉を泣かせた。父に叱られるのはいつも姉の方であった。年上なのにとというのが父の論理であった。

夜の団欒は楽しかった。父は疲れて帰るので肩の凝りを訴えた。夏休みには食後に父が腹這いになって、子供たちがその周りにムカデの足のように並んで、按摩をして上げた。次女が東京で按摩を習得して来て、主役を受け持った。年少組は力のいらぬ頭部と足部であった。手を動かす乍ら、世間話しを、学校の噂などをなごやかに

話し合った。年下が兄や姉にお話をねだった。ジャンバルジャン、クオーバジス、フランダーズの犬、刀工正宗、宮本武蔵など面白かった。直ぐ上の姉はゾーデルマンの憂愁夫人もこのとき梗概をかきかされたと述懐している。母は夜食の用意をした。私は暫くして睡くなった、兄は毎晩私を抱きかかえて、寝所まで運ばなければならなかった。

母は夏休中、一家の食事の用意だけでも大変であったがその他に、子供たちの持ち帰った衣類の洗濯と繕いに忙殺された。衣類は新調は希で大部分順おくりで年下にまわった。上の兄の着物はほどこいて、洗濯し、張板に張って乾かし、次の男子の着物に縫い直した。紺こいね飛白ひびらくは何度洗っても丈夫で色も褪せない。男子は五人であるから五男の私よりも古いお下りの着物を着たわけである。

母はこの時、翌年帰省するまでの一年間の衣類を用意して持たしてやらなければならなかった。一年分の靴下の繕いだけでも大した仕事であった。これを膝の上にし

て、針を手にして疲れて居眠りする、暗い石油ランプの光に照されている母の姿を今も想い起す。在京の学生は洋服に靴をはいた。母の修理した靴下の底は一見雑巾の感じであった。兄が東京に帰ったとき、ある人がその古い靴下を見てどこの店で売っているのかと嘆声を発したという。

父は処生術の拙劣な男であった。蝦夷落ちしたのもそのためだが奥尻では再びその轍をふんだ。三年目やっと慣れた土地を離れて更に辺鄙な土地に移る羽目に陥った。大平洋に面した庶野村で、襟裳岬に近かった。アイヌが沢山住む百戸足らずの家屋に海岸に散在する原始的な村落であった。両親と共に、住居、食物、自然環境すべてにおいて局限に近い最低の生活に堪えねばならなかった。

三番目の兄正男が後年次のように述懐している。

「私も兄弟は誰れ一人すぐれた頭脳の所有者でなかった。たゞ自慢し得ることは誰れ一人酒はもちろん、煙草も吞まず、一筋に努力家であり勉強家であったことであ

ると思う。しかしその努力の原動力は競争意識や自己の栄達意識から出たものでなくて、ひたすらに苦勞する父母をよるこばせようとする一心から滾々として湧出したものであった」

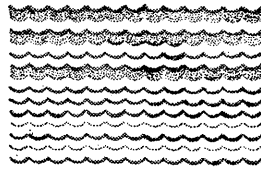
(婦人之友 昭和十八年十一月号)

〔著書紹介〕 明治三十五年十一月一日生れ。昭和四十二年三月まで、お茶の水女子大学生物学科植物学の教授。

著書に『聖書の植物』教文館等があります。昨年(昭和四十二年)の十月号掲載の、大学校内の植物をめぐる座談会に御出席をいただきました。

公園にて

田中三保子



休みの日の午後は、2才の息子とよく近所の小さな公園に出かける。その公園は、ちょっと奥まった新興住宅地の中の、新たに宅地造成された一画にある。

その日は冬には珍らしく穏やかな暖かい日で、公園にはすでに子どもたちがたくさん来て遊んでいた。

珍らしく女性の姿があった。その人はベンチに腰かけて本を読んでいたが、時折目をあげては大きな声をあげた。「あっくん」という呼びかけがしばしばはいるので誰かの母親らしかったけれど、はじめのうちは子どもと母親がなかなか結びつかなかった。ベンチに座ったままで少しも動こうとしなかったせいかもしれない。「あっくん」と呼ばれた子(や

つとわかった、4才ぐらいの男児は同年令とみえる女の子とあれこれ遊んでいたが、やがて連れ立って砂場にやってきた。

砂遊びを始めるとまもなく、あっくんは女の子の使っていたふるいを持ってしまった。女の子が泣き出すと、向こうから「あっくん、やめなさい。返しなさい」と声がかかる。それは全く、文字通り有無を言わせないといった感じの命令口調だった。でも、あっくんはまるで聞こえないかのようにふるいに砂を入れている。「ゴークルフアイブ買ってあげないわよ」と言われても、あっくんは動じる様子を見せない。とうとう母親は砂場までやってきた。そしてもう一度、強く、「そんなことをするとゴークルフアイブ買ってあげないからね」と言った。あっくんは「あーん」とすねたような声を出したが、それでもふるいは手離さなかった。ふるいを持っていない方のあっくんの右手は、ちようど砂場のふちを押さえる形となっていた。そこ

まで来た母親は、あっくんのその右手に自分の右足を重ねる真似をした。それから極めて冷静な調子で「返しなさい。返さないと痛いわよ」と言った。

さすがのあっくんもふるいを手離して、母親に促されて「ごめんなさい」と言った。母親は満足したようにベンチに戻ると再び本を読み始めたが、程なく一人で帰っていった。すぐさま女の子がまた泣いて「おばちゃん」と叫んだ。あっくんは今度はバケツを持っていかれてしまって、母親に訴えているつもりだった。泣き声など耳にはいらぬようなあっくんの様子に、私は使っていなかった息子のバケツを貸して、女の子に返してくれるよう頼んでみた。はじめは無視されたが、二度三度頼むと応じてくれ、ふたりはまた一緒に遊び出した。

そんな出来事があった後、私はずっとあっくんの母親のことが気になってしかたがなかった。親という立場だけでどうしてあんなにいばれるのだろうか。親の論理をあんなに一方的に力で押しつけるこ

とができ、しかもそれが自信に満ちているのが、私には不思議でならなかった。実に冷静に子どもに命令し、屈服させ、そのことに何の踏いも感じていないように堂々として見えたのは私だけだろうか。

その公園へ冬の風の冷たい日に出かけていった時のこと、さすがに人影はなかった。息子と砂遊びをしていると、大分経って、5才ぐらいの男児が2人走ってきて砂場の向こう端で遊び始めた。30分ばかりすると、ひとりの子の祖母と思われる人が迎えに来た。「もう4時だから帰りなさい。約束でしょう」と強く言ったが、その子は「やだ。帰らない」と頑張った。

川を掘り、水を流しはじめたばかりでまだ遊び足りないのであらうか、「帰りなさい」といくら言われても、「帰らないの」を繰り返していた。おばあちゃんはあきらめてしばしおつき合いをする気にな

ったらしく、自分も棒切れで川を掘り始めた。その子は水を汲んできてはジャーと流していたが、その水がまともに自分の脚にかかってしまった。寒いせいもあってちょっとペソをかくと、おばあちゃんはなじるように言った。「ほら、ちゃんと見てないんだから。どうしていつもあんたはこうなの」。そして「拭いてあげないよ」とも言った。

その子はちょっとした間ベそをかいていたが、気がとり直すと水汲みを続けた。おばあちゃんは立ちあがると、「もういいでしょ。帰りなさい」と再び帰らせようとはじめた。その子はとうとう泣き出してしまったが、そこを動こうという様子は見せなかった。一緒に遊んでいた子は、はらはらした様子で成りゆきを見守っている。業を煮やしたおばあちゃん「もう迎えに来ないからね」と言い捨てたが、効果はなかった。その子がちっとも言うことをきかないので、おばあちゃんはいらいらした様子で「もう誰も迎えに来てやらないからね」と、もう一度念

を押した。それでもこたえないとわかると、「帰ってきてもうちに入れてあげないよ。もうはいれないからね」と最後のだめ押しをして帰っていつてしまった。とり残されて泣きじゃくるその子を、もうひとりがしきりになぐさめていた。その後、母親が迎えに来て、彼はしおらしく帰っていき、私も一応ほったした。

おばあちゃんの、孫に対するものとは思えないような容赦のない態度に、私はたまたも脅かされた。何としてもおとなに従わせたいという気持の表われなのかもしれないけれど、それにしても、相手が幼児にしては何と恐ろしい物言いなのだろう。約束の時間に戻ってほしいというおとなの基準（これはしばしば一方的である）に従属させることしか思いつかないのだろうか。従順であることが好ましいこと

で、そうでなければ罰せられても当然と理解しているのだろうか。子どもにだって小さければ小さいなりの感情も理屈も合理性も必然性も（そしてほんのちよつとのわがままも）あって、私などは（情けないことにとというべきか）毎日、我が子とどこで折り合おうかと否応なしに探り合っている。

親であることは、もうそれ自体で子どもに対しては絶対的権力者の位置を占める。たとえ親の論理を押しつけて子どもがそれに従ったとしても、子どもは力に屈服しているにすぎないのではないか。そのとき行なわれている行為を考えてみると、抵抗する手だても考えつかない子どもを弱い者いじめしていることになりはしないだろうか。社会問題として言われている「弱い者いじめ」の原型（あるいは植え付け）が、こういう形で培われているような気がしてならないのは私だけであろうか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



ブリュエールの「子供の遊戯」 12

森 洋子

今回は77から91までの遊戯を論じるが、ブリュエールの「子供の遊戯」に画かれた全部で91種類の遊戯の説明は終りとなる（ただし本連載の最終回は次回となる）。ところで77から89までの遊戯は画面の右上に集中している。その突き当りにはかすかにゴシック聖堂がみられるが、アントウェルペンの聖母マリア聖堂であろうか。町並みはその聖堂に向かって遠近法的に画かれていることに注目したい(図1)。さらに子供たちの姿も奥行の進行と同時に、縮小されていく。そのため個々の遊戯の内容を

厳密に説明するのは困難な場面も少なくない。しかし驚くべきことにブリュエールはどんなに小さく画く場面でも、決してなおざりにすることなく、最後まで遊ぶ子供たちを生々とした姿で画いていたのである。

また画面全体に子供の遊戯が点在しているにもかかわらず、子供たちは町並みと同様に、画面右上の焦点にむかって対角線上に、遠近法的に位置づけられていたことだった。そしてその点がこの絵の構図の与える統一感の秘密ではなからうか。

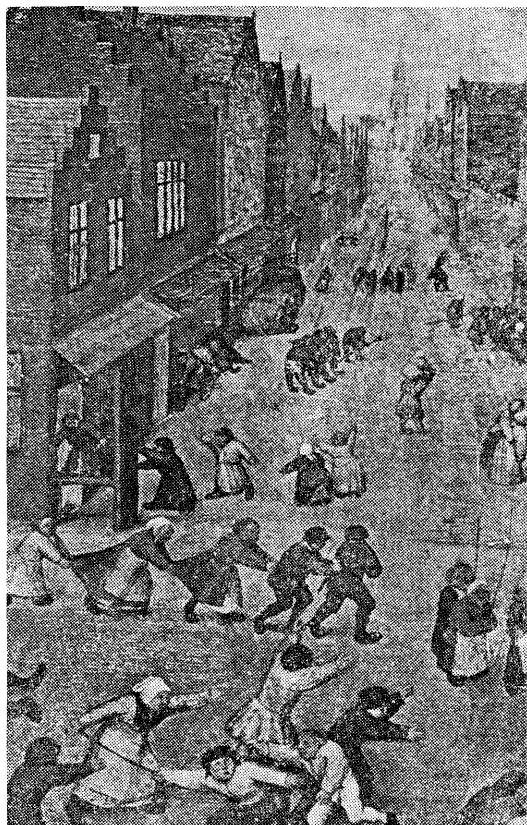


図1 ブリュエール「子供の遊戯」(部分)
1560年 油彩 ウィーン美術史美術館

サ曲を唱っているのであろう。サルトーリは六月二十四日の洗礼者聖ヨハネ誕生の祝日か、八月末の提燈行列ではないか、と推定している。だが図版でこの部分を厳密に調べてみると、第一、第二の子供たちの手にしているのは提燈というよりは聖旗であろう。実際、十七世紀のオランダの銅版画(図3)にみられる提燈行列とは幾分その外見が異なる。とすると六月

77 行列(1) Processie spelen (図2)

四人の子供が棒の先に白い紙かポロ布をつけて、旗行列ごっこをしている。ただし後ろのより年少の二人は松明のようなものを掲げている。四人ともみな神妙な表情をして厳かに歩く。おそらく彼らは宗教行列を真似し、キッチン・ラテンといわれる聞きかじりのラテン語のミ

の聖体行列の可能性も考えられる。聖体行列の祝日は復活祭から数えて61日目にあたるため、年によって異なるがちょうど六月某日となる。しかしブリュエールの第三、第四の子供のもつ棒の旗が剝落によって今日見えなくなったのではなく、松明を掲げていると仮定すれば、六月二十四日の洗礼者聖ヨハネの祝日前夜祭の祝火に関連すると考えられないだろうか。この行列のはるか後方



図2 ブリュール「行列ごっこ」
 (「子供の遊戯」の部分⑦)



図3 「提燈行列」オランダの木版画
 17世紀中期

である。また左上では初夏らしい葉をつけた数本の木々がみられ、その下では子供たちが水泳遊びをしている。ゆえに季節的にも六月二十三日頃の営みと考えても矛盾しない。この「子供の遊戯」が六月二十三日という日付をもつのではという仮説は、これまでブリュールのどの研究者からも提案されていなかった。しかし筆者が、77、85、87の三つの遊びが一致して「洗礼者聖ヨハネ」の祝日に関連していることから、あえてこの新説を

本号で提議したのである。

78 ねずみの尻尾ごっこ Rattenstaart (図4)

に、85の「洗礼者聖ヨハネの祝火」、さらに87の「松明運び」がみられる。こうしてみると、ブリュールはこの絵に、一五六〇年という年記のほかに、ひそかに「六月二十三日」という日付を暗示しようとしたのではなからうか。この画面では91種類の遊戯が列挙されるが、氷滑り、橋滑りなど冬の遊びは画かれていない。つまりブリュールが四季の遊戯を画こうと意図してはいないの

市庁舎の裏側の路地から、六人の子供たちが互いに前仲間の上衣ないしスカートにつかまりながら、鎖状になつて前進している。ド・マイヤーによると、彼らはみなつぎの歌を唱っているといふ。^{注2}



図4 ブリュージェル「ねずみの尻尾ごっこ」
 (「子供の遊戯」の部分^⑧)

「誰、誰が作ったか
 ねずみの尻尾、ねずみの尻尾を。」

誰、誰が作ったか

ねずみの尻尾を

一、二、三」

この掛声とともに一斉にみんな百八〇度むきを変え、今まで最後だった子供が先頭になって前進する。

ハルトマン・レンスは次のような別の歌を考えた。^{註3}

「ハンスちゃん、早く歩け

あの子の服をひっぱって

あの子の尻尾をひっぱって

ハンスちゃんはしょうがな

い。」

子供たちには行列の先頭を「悪魔の頭」、最後を

「悪魔の尻尾」と呼称したが、一定の歌が三回唱い終えるまでに、頭は尻尾を掴まなければならない、というルールである。ラブレの『ガルガンチュア物語』第二十二章でも、*A la queue au loup* (「狼行列」)と名づけているのはおそらく、この遊戯と同種のものであろう。

79 訪問じっじ *Bezoek ontvangen* (図5)

戸口の前で黒い服を着た女の子が両手を広げ、青い服の小さな子供を出迎えている。訪問者はこの「子供の遊戯」の中でもっとも年少の子供に属するだろう。

J・ヒルズは二人の子供たちが何か歌を口ずさみながら、手を取り合っているのだろう、と推定している。^{註4}



図5 ブリュージェル
 「訪問ごっこ」(「子供の遊戯」の部分^⑧)

80 先頭の子供に従え

Erste Mannetje achterna (図6)



図6 ブリュエゲル「先頭の子供に従え」
（「子供の遊戯」の部分㊸）

三人の男の子によるグループ遊び。まず先頭の子供が軒下の横木に登り、下へ飛び降りる。すると続く子供たちはすべてその真似をしなければならない。ド・マイヤの指摘によると、この店は馬蹄屋で、支柱に繋がれた馬が横木の上に足をのせ、

馬蹄具を打ち込んでもらうのである。^註ところでこの遊びは「啞の商売」ともよばれたが、それはすべての動作が沈黙の裡に行なわれるからである。

ドイツではこの遊戯は「鶯鳥の行進」（鶯鳥は陸の上を歩くとき、一列縦隊で並ぶ習性があるため）とよばれた。リーダー格の子供

は最初は緩慢に、次第に速歩で歩く。また溝を跳んだり、高い所に登ったり、かなり荒っぽい行動をとるが、続く子供たちはその真似をしなければならない。最後まで真似のできた子供が次にリーダーとなるが、脱落者は仲間

81 ベンチから突き落せ

Van de Bank duwen (図7)



図7 ブリュエゲル「ベンチから突き落せ」
（「子供の遊戯」の部分㊸）

家の前壁に沿って、一個のベンチがあり、その上にまがった四人の男の子がわが国でいう「押しくらまんじゅう」をしている。この絵では三人の男の子ABCが一人の男の子Dと背中合わせになって、押し合いながらD

をベンチから落そうとしている。Dはしっかりとベンチに握りながら抵抗する。こうして、もしDが落ちた

列にいた子供は「マダムちゃん」という風に交代する。

この遊びについて、J・ヒルズは全く別の仕方を考え^{註7}た。それは80番の遊戯でも行なわれるが、ネーデルラン

トに古くからある「啞の商売」*stommen ambacht*という一種のジェスチャーごっこである。子供たちがある特定の職業を身振りで真似て、組んだ仲間に応じてさせるという遊びである。ラブレの『ガルガンチュアの冒険』の第二十二章にも *Aux mestiers* (「商売当り」という遊戯の列挙があるから、十六世紀のフランスでもポピュラーだったのだろう。

なおこの遊戯の原題 *Duïke, duïke, reve* のうち *reve* を「与える」と訳したのは、あるいは *geve* の誤植ではないかと考えたからである。

84 馬のベヤールトとヘーム伯の四人の子供た

ち *Ros Beiaard en de vier Heemskinderen* (註10)

ひとりの男の子Aが大きな箒を両手にもっている。Aに相対して、四人の男の子が大股をひらき、互いの腰部

をしっかり掴んで並んでいる。Aはその箒を彼らの足の間に入れようとする。その瞬間、先頭の子供は箒の柄をすばやく掴み、他の三人の子供とともに馬乗りになって、疾走しはじめたAを追跡しなければならない。もしAを捕えたら、彼は列の後ろにつき、先頭の子供がAの役をする。

この遊びはド・マイヤーによって馬のベヤールトとヘーム伯の四人の子供ごっこであろうと推測された。^{註8}これはカロリング王朝のシャルマーニュ大帝(七六八―八一四)にまで遡り、大帝の西ヨーロッパの領地拡張に抵抗したドルドーニュのエモン伯(その妻は大帝の姉妹)とその四人の子供の逸話である。この物語は十二世紀に *Renaus de Montauban* という古いフランス語の武勲詩に編纂され、一四九三年にはリヨンで民衆本として出版された。続いて十五世紀末にオランダ語版 *De historie van de vier Heemskinderen* が、ついに一五三一年にはドイツ語版 *Schöne Historie von den vier Haimons-kindern* が刊行された。オランダ語版での四人の子供た



図11 「馬のベヤールト」アット市の巨人祭り
1976年



図10 ブリュージュル「馬のベヤールトとヘーム伯の四人の子供たち」(「子供の遊戯」の部分⊗)

ちの名前は Adelaart, Ritsaart, Wrisaart, Reinout と呼称され、ネーデルラントでも自国の中世騎士物語としてかなりポピュラーであった。

このヘーム伯の子供を歌った詩が伝えられている。^{注9}

「馬のベヤールトは両足を高く上げる

彼は火の中で死んだのだ

尻尾にはリボンをつけ

頭には羽根をつけ

その上には四人の兄弟が坐っている。

馬のベヤールトはデンデルモンデの町を

ぐるぐる回る。

アールストの人びとは馬のベヤールトが

いまここに来たので

とても怒っている」。

筆者が一九七六年ベルギーに滞在したとき、同国の巨人祭りでもっとも著名なアット市の「巨人の結婚祭り」(八月二十八日)を見学することができた。高さ四、五メートル、重さ百キロ以上の巨大な人形が町を行列するの

であるが、それぞれの人形は旧約聖書のゴリアテとゴリアテ夫人、ギリシャ神話の勝利の女神、聖クリストファ、十七世紀のアルブレヒト公とイザベラ公妃など民衆のよく知っている主役たちであった。その中で一段と人気があったのが巨馬のベヤールト(図11)である。重さは約六〇〇キロで、中に六人の屈強の男たちが入り、馬をかついでいた。そしてその馬の上には四人の四才以下の子供たちが得意気に乗っていたが、彼らは担ぎ手の子供ということだった。馬の胴体には赤い掛布が、さらにその上には種々なギルドの旗がみられ、また頭部には上記の歌のような青い総が飾られ、目はタンニン色の若駒らしい皮膚の色を示すなかなかの迫力のある巨馬であった。このようにネーデルラント化した中世の騎士物語がブリュージュの時代の子供の遊戯に、そして今日のベルギーの巨人祭りにも登場するなど、その民話の生命力の強さを真近に感じたのである。

85 洗礼者聖ヨハネの祝火 St. Jansvuur (図12)

道路の真中で、一本の松の木の回りに六、七人の子供たちが焚火をしている。これはおそらく洗礼者聖ヨハネ誕生の前夜、つまり六月二十三日の祝火なのである。この夜のために子供たちは日中、山から枯木を集めたり、隣人から薪をもらったりした。ハルトマン・レンスはつぎの歌を紹介している。^{注10}

「ぼくらは木々を取りに行こう
泥炭を取りに行こう。」



図12 ブリュージュ「洗礼者聖ヨハネの祝火」(「子供の遊戯」の部分)

洗礼者聖ヨハネの日のやり方で

昼も夜も、

毎年やっているように。」

ここで注目すべきは、当時、祝火のための種火はかまどからではなく、必ず石ないし木を摩擦して熾こしたものである。この習性はわが国の神社でもご神火を熾こすと



LES PETIS FEVX
Ce leur est une volupté
de sauter, au cœur de l'été,
par dessus ces feux de bonnie;
Mais si le plaisir de ce jeu
ne dure pas plus que leur feu
il sera de courte durée. 11

図13 クローディン・ブゾネ・ステラ「小さな火」
(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より)

きに行なわれる万国共通のもので興味深い。

ではなぜ、洗礼者聖ヨハネの祝日に焚火が行なわれるのであろうか。

マイヤーの百科事典によれば、ヘロデ王がヨハネの斬首が成功したと聞き、喜びの祝火をしたという。^{注11} 実際、十二世紀以来、ヨーロッパではこの夜、祝火の囲りで人びとは踊り、跳びはねて楽しんだという。さらにその煙、灼熱、灰などは家畜を病気から守るのに効目があると信じられていたのであった。

なおブリュエルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にも遠景の町角で焚火の情景がみられる。ここでは炎は一階の軒下まで登り、大人も子供もその囲りに手を繋いで踊っているようである。灰の水曜日の前日、すなわち謝肉祭でも焚火が行われたのであろうか。

十七世紀のリオン生れのジャック・ステラの詩「小さな火」には、焚火で遊ぶ子供の姿に次のような教訓の意味がこめられていた(図13^{注12})。

「これは彼らにとってひとつの悦びだ

真夏に、薪の火の上を跳びはねるのは、

しかしこの遊びの楽しみは

その火以上には続かない

悦びは短い間しか続かない。」

86 薪木を運ぶ Takkenbossen dragen (図12)

かなり年長の男の子が背丈より高い雑木の枝束を重そうに肩にかけて運んでいる。85の「焚火」のグループのひとりと考えられる。

87 松明運び Fakkel dragen (図13)

85の「焚火」の左側に手に松明をもった子供が、焚火の仲間たちに近づいていく。ド・マイヤーはこの行為を「松明を運ぶ」という独立した遊戯に考えているが、筆者はむしろ、「焚火」のグループに入れるべきでないかと考える。

88 戸口の前へ歌う Zingen aan de Deur (図14)

五、六人のグループの子供が戸口の前で歌っている。

ド・マイヤーによると、六月二十四日の洗礼者ヨハネの生誕日の前後、子供たちが仮装して道路を走り回り、家から家を訪れ、卵、お金、お菓子などを貰う。その後仲間が集まり、貰いものを互に分けあったという。^{注14}すると現在もアメリカで行なわれる十一月のハロウインの祭りのようなものかもしれない。しかしブリューゲルの絵では子供たちがどんな風に仮装したのかは判明できない。ただ少し離れたところにオレンジ色の服の女の子が槍のような棒を手にしているが、それが仮装の一部なのだろうか。



図14 ブリューゲル「戸口の前で歌う」(「子供の遊戯」の部分⑩)

89 散歩

Wandelen (図15)

85の「洗礼者聖ヨハネの祝火」の前方に二人の子供が画面

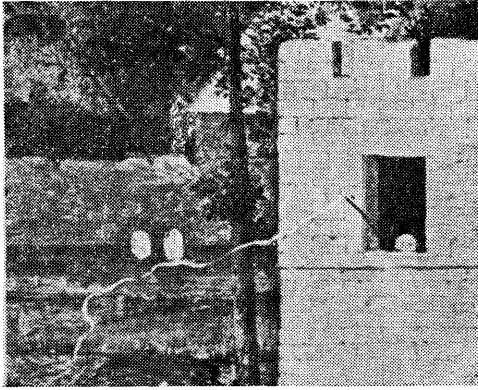


図15 ブリュエゲル「吹流しを垂らす」
 (「子供の遊戯」の部分⑨)

の前方にむかって歩いていて姿がみられる。ド・マイヤーは「散歩」^{注15}、J・ヒルズは「薪割り」または「指の引っぱりごっこ」^{注16}と全く別の意味に解しているが、筆者にはいずれも確証はできない。むしろ向かって右側の人物が何か雑木の小枝のようなものをついでいるのに注目すべきで、おそらくは85、86、87とともに「祝火」と関連しているのではなからうか。

90 吹流しを垂らす Den Wimpel nihangen (図15)

大きな市庁舎風の建物の二階の窓枠から、男の子の顔だけがみえるが、彼は棒の先きに数メートルもある白い吹流し(というよりはリボンのようであるが)を垂らし、風にはためくのを楽しんでいる。ハルトマン・レンスはこの男の子は釣の真似をしているのでは、と想像しているが、筆者にはむしろ単に吹流しの動きをみているようにしか思えない。ブリュエゲルのこの絵では、7の「仮面ごっこ」にも、この男の子のように顔だけが窓から見えるといった手法がとられている。

91 籠をぶらさげる De Korven nihangen (図16)

90の吹流しで遊ぶ男の子の右横の窓から、別の男の子が手をのばして籠を壁の釘に掛けようとしている。籠の中には一足の靴、把手には一足の木靴 Klompen がひっかけられている。もう一個の籠には柴が差し込まれている。ド・マイヤーはこの籠は「生計の憂いのない籠」

den Korf zonder zorg」という成句を表わしている」と推測している。^{注18}ハルトマン・レンスはこの男の子は大胆にも他所から籠をこっそり取って来て、それを高い窓の中に隠すという悪戯をしているのであろう、とも述べている。^{注19}いずれにせよ、この遊戯の意味は不明だが、窓に掛けられた籠は「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にも見出される。ゆえに何かを隠したがる子供の悪戯ではなからうか。

注1 Paul Sartori, *Sitte und Brauch*, Bd. III, 269, Anm. 52. 現在ドイツではこの提燈行列は十一月五日の聖マ

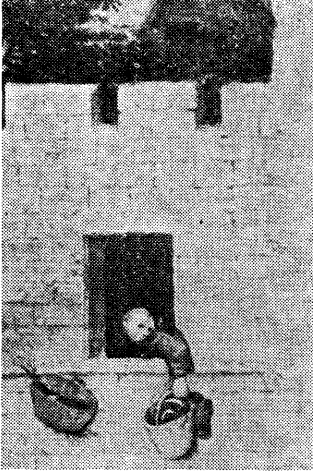


図16 ブリュエゲル「籠をぶら下げる」(「子供の遊戯」の部分⑩)

マティンの祝祭日に行なわれた。²⁰

- 注2 Victor de Meyere, *De Kinderspeelen van Pieter Bruegel den Oude verklarard*, Antwerpen 1941., p. 10.
- 注3 F. Hartmann en E. Lens, *Hetel Joh!* Amsterdam 1976, p. 91.
- 注4 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspele 1560*, Wien 1957, p. 52.
- 注5 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.
- 注6 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.
- 注7 Hills, *op. cit.*, pp. 52-53.
- 注8 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.
- 注9 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 100.
- 注10 *Ibid.*, p. 103.
- 注11 Meyer S *Enzyklopädisches Lexikon*.
- 注12 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris, 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 11.
- 注13 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.
- 注14 *Ibid.*, p. 12.
- 注15 *Ibid.*, p. 12.
- 注16 Hills, *op. cit.*, p. 54.
- 注17 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 123.
- 注18 De Meyere, *op. cit.*, p. 12.
- 注19 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 124.

本年の八月号も亦、緑蔭図書紹介を特集いたしました。今回は、執筆者七名のうち、私どもに近しい編集者二人にも参加を願った次第です。なにしろこの御兩人には、読書量の多さに由来する博識で驚かされたり、又、心に蜜を秘めながらでしょうが、口に針もつ批評をいつもいただいているのです。プロの本の読み方とは如何なるものであり、自己との「ディ

アレクティーク」でもある文章表現は、どのように澄明潤達であるべきか、範を乞うべく御執筆を懇願いたしました。どうか御熟読下さいますように。

森洋子氏の「ブリュゲルの『子供の遊戯』」は、一昨年の八〇巻第五号からほぼ各月おきの連載で、本号十四回もちまして、約九〇種の遊戯の説明を完了いたしました。そして残る一回、今までの遊戯をふまえての総論をお届けいたします。毎回くりひろげられてきましたように、子どもたちの遊びはアレゴリーと

強い結びつきをもって説明されました。当時にあつては、観念が目に見えるものとしてあり、ひときわ子どもの遊びの中に明瞭に像をむすんだということなのでしょう。今回の文化論的展開が待たれます。なお、本連載が単行本として準備されつつあることもつけ加えていただきます。

「幼がたり」は、関根慶子氏に始まり、本号は、中村為治氏、大槻虎男氏に御寄稿を賜りました。これからも老成された魅力に富む方々が続々と登場されますので御期待下さい。

三十年間、本学教官、又、本誌の編集・発行責任者を務めてきました津守真先生が退かれることになりました。先生の保育学研究の足跡は、本誌のバックナンバーを手にとってゆけば鮮かに辿ることが可能でしょう。津守保育学は、本誌の顔そのものでした。私どもは、その行く手を見守り続けたいと思います。(美)

幼児の教育 第八十二巻 第八号

八月号 ①

定価三〇〇円

昭和五十八年 七月二十五日 印刷

昭和五十八年 八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 田 和 子
発行人 本

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

①望ましい生活習慣

②望ましい集団づくり

③望ましい当番活動

④望ましい行事と生活

⑤望ましい言葉の指導

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価 6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

文部省・著

幼稚園における 心身に障害をもつ幼児の 指導事例集

障害をもつ幼児を受け入れる心構えと、指導の事例を豊富に提供!!

本書は、障害をもつ幼児に対する指導のあり方や、受け入れに当たっての考え方など、基本的なポイントを示したものです。各地の幼稚園の指導事例が豊富に紹介されていますので、実際の保育指導に大へん役立ちます。

A5判・184頁・定価90円
